



Tokyo College of Music

東京音大ジャーナル41号
http://www.tokyo-ondai.ac.jp

Journal

December
2014
No. 41

〈特集1〉充実したオペラ指導 ―その手厚さとは…	2	東京音楽大学合唱団 日本フィルハーモニー交響楽団と共演 弦楽アンサンブル演奏会	18
〈特集2〉映画・放送音楽コース 開設から25年	6	第13回 東京音楽大学コンクール	19
国内外でチャレンジする学生たち	10	夏の合宿	20
バイエルン州立青少年オーケストラ合宿	12	卒業生インタビュー	22
日本スペイン交流400周年記念コンサート	13	2015年度 企業内定者インタビュー／4年生の就職内定企業一覧	25
上智大学との単位互換制度	14	教員からのメッセージ	26
「癒しの森」での文化交流	15	東京音楽大学付属高等学校の教育	28
東京音楽大学 シンフォニーオーケストラ定期演奏会	16	音楽と共に成長する	30
東京音楽大学 シンフォニック ウインド アンサンブル定期演奏会	17	Tokyo College of Music Journal NEWS	31



Concerts 2015

東京音楽大学主催演奏会

特別演奏会 エリッソ・ヴィルサラーゼ ピアノリサイタル&マスタークラス
2月26日(木) 18:00 東京音楽大学100周年記念ホール

卒業演奏会

4月27日(月) 19:00 東京文化会館小ホール

シンフォニック ウインド アンサンブル定期演奏会

7月13日(月) 18:30 東京芸術劇場コンサートホール

ソロ・室内楽定期演奏会

7月19日(日) 13:00 東京音楽大学100周年記念ホール

ピアノ演奏会 ～ピアノ演奏家コース成績優秀者による～

7月31日(金) 13:00 東京文化会館小ホール

第7回 声楽教員によるコンサート

9月19日(土) 16:00 東京音楽大学100周年記念ホール

第8回 ピアノ教員によるコンサート

10月10日(土) 17:00 東京音楽大学100周年記念ホール

弦楽アンサンブル演奏会

10月24日(土) 17:00 東京音楽大学100周年記念ホール

シンフォニーオーケストラ定期演奏会

11月27日(金) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

【お問い合わせ】東京音楽大学 演奏課 03-3982-2496

2015年度

東京音楽大学入学試験日程

一般入学者選抜試験

2月16日(月)～2月20日(金)

願書受付期間：1月13日(火)～1月19日(月)

※郵送受付のみ。1月19日(月)消印有効

〈声楽・器楽〉特別選抜試験

3月22日(日)～3月24日(火)

願書受付期間：3月6日(金)～3月10日(火)

※郵送受付のみ。3月10日(火)必着

2015年度

東京音楽大学講習会日程

夏期受験講習会

7月27日(月)～7月31日(金)

受講申込期間：7月2日(木)～7月9日(木)

冬期受験講習会

12月23日(水・祝)～12月27日(日)

受講申込期間：11月26日(木)～12月3日(木)

【お問い合わせ】東京音楽大学 教務二課 03-3982-3221



「愛」で終わってしまふ。そこにメロディーが

オペラとは… 演出指導の意味とは…



栗國 淳 Jun Agui
客員准教授
演出家

オペラは、さまざまな要素で構成されています。そして、人間の内に秘めた、言葉だけでは伝えられない、届かないメッセージを、単なる言葉を乗り越えて永遠のものにするためには、やはり音楽が必要だと思っています。

例えば愛という言葉をごだけ叫んでも、

オペラを教えること

演出家である私は、稽古の時に「ああして、こうして」といろいろと要求します。しかし、本番のときには自分はステージには立たない。「舞台上で歌うべき声を聴かせてほしい」と学生から言われても、歌い手ではないので、私はその声を発せられない。でも、その代わりに私は演出家です。私はオペラ演出家として、楽譜に何が書かれているのか、その意味は何なのか、自分の恩師や経験から得て蓄積した自分のカードを、全部学生の前に広げて見せるんです。それがヒントになり、使えるのなら、どんどん使ってほしい。一方、カードを見せられた学生は言われたとおりにすればいいわけではないので、悩みます。なかなかそこたどり着けない。でも彼らは悩み、苦しむことによって、今度は自分の身体と声に向き合い始め、「ああ

演出



〈特集〉 充実した オペラ指導 —その手厚さとは—

人間とその人生を壮大に奏でるオペラ。
東京音楽大学ならではのオペラ指導を
ご紹介します

エルマンノ・ヴォルフガング・アリアーノ
イル・カンピエロ (全3幕)
ヴェネツィア・間・イタリヤ 阻止演

2014年10月10日(金) 14:00
東京音楽大学100周年記念ホール

指揮: 田代 俊文 演出: 栗國 淳
コレパティール: 森島 英子 言語指導: エルマンノ・アリアーノ



高橋 啓三 Keizo Takahashi
教授 (オペラ講座代表)

声楽家を目指す人の多くは、オペラ歌手に憧れを抱いていると思います。本学は私学で、古い音楽大学であり、オペラ指導に携わる先生方は、当初から日本を代表するアリマドナの方たちをはじめとした、素晴らしい教授陣でした。現在はさらに進化し、学生への愛と情熱に満ち溢れる、精力的なオペラ指導が日々実践されています。

層の厚い、超一流の指導人

本学のオペラ指導において、まず特筆すべき点は、声楽教授をはじめとする指導者の層が厚いことです。世界的に活躍している演出家の先生方をはじめ、指揮、コレパティール、言語指導、身体表現など、専門の先生が多数おられます。また、照明では文部大臣賞を受賞した専門家が、長きにわたり、高等学校から大学院の公演まですべてを担当しています。

加えて、付属高等学校よりその後、大学、大学院、また博士課程でも学ばうとすれば、計11年間以上オペラを学ぶことができます。

3つの教育の柱

「声をよくする」「よい音楽家を目指す」、そして「人間性を高める」という3点を、常に私は教育の柱にしています。中でも一番大事なのは「人間性」。声を出している時に、「なぜそういう声を出したいのか?」「この人は何を考えているのか?」「この台詞をどういうふうに行いたいのか?」と考え、掘り下げることは人間性を高めます。

「アンサンブル」という言葉があります。相手から発せられたものを受け止め、それに返す行自分の声ってこうなんだ」とか、こう演じる」とこうなるんだ」と、自分自身で気づくようになる。それが最終的には生きた一人ひとりの個性やスタイルをつくり上げていくのです。

スイッチを入れる

とても面白いことに、最初は我々がいろいろなカードを見せて、学生の可能性を引き出すのですが、その後は誰でも皆、自ら進化していきます。記録ビデオを撮って本人たちに見せたいくらいに、彼らはあるときから変貌する。彼らの心と身体の中どこかで、カチャってス



「舞台基礎演技法」の授業風景

オペラに限らず、自分が本当に何かを求めるのなら、自ら積極的にアクションを起こさなければいけません。他人を頼るばかりでは、アーティストとしては失格です。我々が提供するヒントを、一度自分の頭で分析し、考え、さまざまな方向性でアクションを起こさないと、自分ならではの表現はできないと思います。そして、仮に歌い手になれなかったとしても、そうした強い精神は自分の中に入り込んでいく。その精神を持っていくか持つていないかで、どんな恋愛をしても、格段に差がつくでしょう。自分に決して嘘をつかず、少しでも前に前に向かう気持で、人生という壮大なオペラを演じてほしいと思います。授業では、私も決して嘘はつきませんので。



為は、人間にとって非常に大事なプロセスです。例えば、友達と何でもうまくできる人とそうではない人が一緒に舞台上に立ったとしても、「自分が相手に何かを与え、相手の表現を自分は受け入れる。それがなくてオペラは成り立たない」とことを理解していくうちに人間性は高まり、相手と一緒に素晴らしいものを創ろうという気持ちが生えていくのです。

オペラ、そして音楽を学ぶ意味

本学は、「舞台人として人々に感動を与える」「教育者として子供たちに夢と希望を与える」、また、「企業に就職し、音楽によって輪を広げる」人材を育て上げます。そして、一番重要なことは、どのような職業に就いても、自分の周囲の人間や社会に、自らの音楽の力で貢献することです。本学には、好奇心旺盛で、自分がやりたいことを一番大事にする人、そして、音楽が好きでたまらないという人に、ぜひ入ってほしいと思います。我々の教育がきつと役立つことでしょう。すべての音楽の源は歌だと思えます。歌を勉強することにより、指揮、作曲、演出など、将来さまざまな音楽の道が開けると思いますが、音楽を通して、「真に豊かな職業」社会に貢献する職業」にも就けるのです。

自分の思うように訳しなさい。それから歌いましょう」と指導しています。実際、詩の内容を理解するだけで、歌が変わるんです。

「イル・カンピエッロ」は、大変苦勞した作品でした。ヴェネツィア語のオペラで、発音や単語はイタリア語とは違うし辞書もありません。私自身もイタリア人の先生について勉強し、私が出した知識を学生と共有しながら進めていきました。最初はちんぷんかんぷんだった学生が、幸せな顔をして、あの素晴らしい公演をするまで伸びていく。そうした姿を目の当たりにする時が、一番うれしいですね。



田代 俊文
Toshiyumi Tashiro 准教授

音楽大学だから学べる

「オペラ」は本当に手作りです。その道のプロフェッショナルが集まり、一人ひとりが自分の持っている技量や時間を出し合い、いろいろな要素が絡み合せて化学反応が起き、ある時いいものが「ドン！」とできる。「イル・カンピエッロ」は、歌い手にとっても、指揮者にとっても最高に難しいオペラでした。音楽が芝居の台詞のテンポで書かれていて、そのテンポがめまぐるしく変わるんです。オーケストラは台詞に合いの手を入れる形で入るわけですが、言葉を発する歌い手が正確に譜面を読めなければ入れない。ヴェネツィア語の譜読みは苦勞の連続でした。しかし学生たちは意欲的で、夏休みに特別な練習もしました。まずは譜面を読むところを森島先生に指導してもらい、それを各自ができるようになってから音楽的なアンサンブルをつくり上げ、そこに栗園先生の演出指導で、細かな点を「ここはこう」と具体化していくことで、最初はバラバラ



「イル・カンピエッロ」

本物のコレペティールは、日本にはまだ少数ではないかと思います。と言いますのは、コレペティールとは、ドイツのオペラ劇場の職種の一つで、劇場のない所には存在しなかったからなのです。その役割はさまざま、日本の場合は、声楽家を中心にして、その周りをコレペティールが固めるという形で発展しました。立場の違う教員がチームを組んで個人指導するわけですから、コレペティールがいる音楽大学はとても贅沢だと思います。レッスンは、曲の「言葉を読む」ことから始めます。言葉がわからないで歌うことは、「あいうえお」って歌うのと同じ。いつも学生には、「辞書や教科書を使い、

指揮



森島 英子
Eiko Morishima 講師

「オペラ」は本当に手作りです。その道のプロフェッショナルが集まり、一人ひとりが自分の持っている技量や時間を出し合い、いろいろな要素が絡み合せて化学反応が起き、ある時いいものが「ドン！」とできる。「イル・カンピエッロ」は、歌い手にとっても、指揮者にとっても最高に難しいオペラでした。音楽が芝居の台詞のテンポで書かれていて、そのテンポがめまぐるしく変わるんです。オーケストラは台詞に合いの手を入れる形で入るわけですが、言葉を発する歌い手が正確に譜面を読めなければ入れない。ヴェネツィア語の譜読みは苦勞の連続でした。しかし学生たちは意欲的で、夏休みに特別な練習もしました。まずは譜面を読むところを森島先生に指導してもらい、それを各自ができるようになってから音楽的なアンサンブルをつくり上げ、そこに栗園先生の演出指導で、細かな点を「ここはこう」と具体化していくことで、最初はバラバラ

ディクシオン(言語指導)



エルマンノ・アリエンティ
Ermanno Arienti 講師

リブレットやその言葉の裏にある歴史や文化など、あらゆる面での知識と理解がないと、いいオペラは成立しません。歌に深みが出ないんです。逆にそれを知っていると、歌い方はまったく違ったものになる。お客さまから見れば、「知ってて歌ってる」と、本気、本物に聞こえるように演じられるんです。東京音楽大学ならではのものが「ディクシオン」、いわゆる「舞台発音法」のレッスンです。学生はピアニストを連れて好きな曲を持ち込みます。それを私がイタリア語で個人指導をします。このようなレッスンをしている音楽大学は非常に珍しいでしょう。



「オペラ実習」の授業風景

専攻・学年の枠を超えた、在学生だけのオペラサークル



2014年東京音楽大学芸術祭「夏の妙薬」

東京音楽大学公認サークル「Dda Cppo・Al fine」は、創立11回目。毎年の芸術祭では、学生有志のオーケストラと合唱が加わり、フルオーケストラの演奏によるオペラ全幕を上演します。演出と言語指導は講師のアリエンティ先生が担当し、指揮、照明、大道具など、すべてが学生たちによって行われます。

歌は人間が奏でるもの 人生経験が その声を色づける

Sounder Durga
醍醐 園佳さん

声楽家 ソプラノ
2006年公立卒業、2004年大学院修了

歌を学び始めて、今年で20年。これまでさまざまな紆余曲折がありました。今回、東京二期会オペラ劇場「チャールダーシュの女王」でシルヴァ役を演じることができたのも、付属高等学校から大学院までの9年間、東京音楽大学から得た蓄積のおかげだと思います。歌は生身の人間が奏でるもの。人生を楽しむ、苦しみが、精神的に成長しなければ、素晴らしいオペラは演じられません。そして、学生時代に愛情あふれる先生方から授かったことは、卒業後も人生のさまざまな局面でよみがえり、助けてくれます。

遅かったスタート
母親の家系が皆音楽を学んでお



Profile

東京音楽大学付属高校、東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。同大学院修士課程修了。第49期二期会マスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。オペラ「ドン・ジョヴァンニ」「フィガロの結婚」「鴉りの女教師」「天國と地獄」等に出演。台湾にて、日本歌曲演奏会、ペーパートヴェン(第九)、ヴェルディ(クワイエム)のソリストを務める。14年11月東京二期会オペラ「チャールダーシュの女王」シルヴァ・ヴァレス役にて出演。2015 CHANEL Pygmalionアーティストに選出される。現在、東京音楽大学付属高校、順天中学高等学校非常勤講師、二期会会員、啓声会会員。

り、特に叔母がオペラ歌手という環境で育った私は、小学生の頃から声楽家になるつもりでいました。とはいえ、受験のため初めてレッスンに行ったのが中学3年の5月です。から、遅いスタートでした。

音楽の勉強に目覚める

付属高等学校時代をのんびりと楽しんでた私に、転機が来ました。高校3年であるコンクールに出場した時のこと。一緒に応募した親友は入賞しましたが、私は舞台上で頭の中が真っ白になり、まったく歌えませんでした。それはとてもつらい出来事でした。大学は、希望していた声楽演奏家コースには入れず、声楽科に入学。その時から、付属高等学校時代とは人が変わったように音楽の勉強漬けの日々。2年生で声楽演奏家コースに転科しました。それからはいろいろな演奏会への出演など多くのチャ

私は不器用だから演じることは難しい。
だからシルヴァになりきりました。



卒業生インタビュー

INTERVIEW

ンスもいたいて、大学、大学院時代は充実した時期だったと思います。長かったスランプ
ところが、卒業してから長いスランプを迎えました。

と、ところが、卒業してから長いスランプを迎えました。学生時代は大学に守られていたんです。毎週定期的にレッスンもあり、うまく歌えない時には自分よりも先に先生が気づき、直してもらえます。しかし、社会に出たら、同じようにレッスンを受けるわけにもいかず、自分では気づかないため悪い方向へ進んでしまう、という悪循環に陥りました。

今になって気づく教える

そんな中、演奏会で共演した、あの年代の声楽家の方の歌を聴いて、同じ人間がこんな素晴らしい歌を歌える。もっと努力してもう一度頑張ろう」と思いました。演奏会にも足繁く通い、自分の歌をさらに深く考え、体調や精神状態と声との関係など、自分に問いかけてみるようになったんです。その答えの多くは、学生時代に学んだことでした。おかげで、気づけばスランプから脱出した、今回のシルヴァ役にたどり着きました。

その稽古中も、恩師に「声だけで勝負するな」「自分の音楽を作りなさい」とよく指導されたことを思い出して、初めてその意味を理解しました。

東京音楽大学のオペラ指導は本当に素晴らしいものです。「チャールダーシュの女王」では踊るシーンが多く、オーディションに向けて、バレエのレッスンにも通いました。バレエを大学で習えるのも魅力です。学生に戻って、もう一度教わることができたらどんなに役立つことか。学生時代に教わったことの意味が分かります。とても長い時間がかかりました。ただ、それでいいと思っています。歌は人間が表現するもの。それが、そのためにはさまざまな経験が必要なんです。スタートは遅くてもいいんです。



映画やドラマなど 商業音楽のプロに求められる 音楽力と人間力を養う

三枝 成彰 *Shigeaki Sugawara* 客員教授



進化し続ける 音楽シーンに対応する

小六 禮次郎 *Reiji Kōroku* 教授

現代の音楽文化のなかでも重要な位置を占める、ポップスや映像音楽に関して、その作曲の方法論を、「体系的」「専門的」に学ぶ場所が必要だと考え、開設したのが本コースです。

25年間蓄積された財産

レコードやカセットテープしかなかった時代と比べ、デジタル化した現代の音楽シーンは、目をみはる勢いで変貌し続けてきました。しかし本コースの最大の強みである、音楽現場で現役として活躍している教員の存在により、我々は常にその時代の最先端の音楽に即して指導しています。その25年分の蓄積こそが本コースの大きな財産です。



もうひとつの大きな財産が「人的ネットワーク」。この25年間で数多くの優秀な学生が巣立っていき、誰もが知っているテレビドラマ、映画の多くの曲を、作曲しています。彼らは、東京音楽大学作曲「映画・放送音楽コース」という木の幹から生ええたみずみずしい枝葉であり、幹を通じてつながっています。音楽シーンこそ日夜変貌していますが、卒業後の「仕事」という意味では、今も昔もこの「つながり」が重要なことになりません。在学中のみならず、社会に出てもしっかりとつながる25年分の人的ネットワークも、我々の大きな財産でしょう。

さらに進化する 音楽シーンを見据えて

音楽を取り巻くインフラは、今後さらに加速的に変貌します。CDを追いやり、現在の主流となったMP3音源もインターネット環境の容量が増し、データ処理機能の向上とともに、さらに高音質なフォーマットに代わるでしょう。そしてその結果、世界中の我々がまったく知らないようなところから、非常にクリエイティブの高い音が発信され、日本発の音楽も顕著されかねない時代がすぐに来ると思います。

これからは、外に向けて音楽を発信する際の方法論も非常に重要になります。人間の心や情感で表現する音楽コンテンツに加え、語学も含めたその発信方法や、聴かせ方まで考えていく。本コースではそれらのことも念頭に置き、次の25年を迎えていくつもりです。

開設から25年

映画・放送音楽コース

〈特集2〉

商業音楽を学べる日本での初めての大学

映画・放送音楽コースが開設されるまで、商業音楽を学べる音楽大学は日本にありませんでした。世界的に見ても珍しかった時代です。反対の声も少なくないが、当時の理事長の決断により、東京音楽大学は他大学の先陣を切りました。

開設にあたり、最高の講師陣をそろえたことはもちろん、音楽業界で即戦力となるカリキュラムを構築したことが素晴らしいかと思っています。いち早く、コンピュータでの作曲指導を始め、基本練習を重ねるよう指導しました。学生たちは、課題提出に追われる厳しい環境のなかで鍛え上げられていったのです。

業界を席巻する卒業生たち

今や、映画やドラマで活躍する作曲家の多くが東京音楽大学の出身者です。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」やNHK大河ドラマ「龍馬伝」を手がけた佐藤直紀君、「題名のない音楽会」(テレビ朝日系)の編曲やミュージカルの音楽監督を務める山下康介君、そして今年の大河ドラマ「軍師官兵衛」の音楽も菅野祐悟君です。このような優秀な人材を輩出していることは東京音楽大学作曲「映画・放送音楽コース」の誇りであり、時代を読むことに成功した、日本で最高の商業音楽専門コースです。

時代の最先端をいく 音楽制作環境と教員

難波 弘之 *Hiroshi Nambu* 教授

現在は、「シンセサイザー」という講義を担当しています。これは、あくまでも、PCを使って卒業制作を作るための準備、基礎教養を身につけるための講義です。入学時は、コードが読めない、シンセサイザーに触ったことがない、ドラムの打ち込みをやったことがない、といった学生も多々います。そこで前期の講義では、まずシンセサイザーのシミュレーターを使って実際に打ち込みを体験してもらい、トラックやミキサーの概念、タイミングのずれ等の修正方法、バランスの取り方を、後期では、音の3要素、シンセサイザーの理論、音色の作り方などを学びます。

東京音楽大学ならではの 機材と人材

レコーディングスタジオでは、ドラム、ベース、ピアノ、ギター、ストリングス、歌も録ることができ、楽器や音楽専攻の学生に録音に参加してもらうこともできます。録音専門の先生が2名常動しているので、その音質は申し分ありません。まさにプロ仕様の録音システムを備えています。

入学時から現場を学ぶ

私が仕事を始めた頃は、音楽業界独特の慣習や用語など、誰も何も教えてくれず、仕事をしながら自ら覚えたのですが、本コースのいいところは、現在、音楽業界で活躍されている先生方が多く、「プロフェッショナルな音



一流の人間になれる

言うまでもありませんが、音楽業界は大きな転換期を迎えています。我々は更なる新しい道を探すべきです。

そのなかでひとつ言えるのは、ここ東京音楽大学は一流の人間を養成する学校だということです。それは、一流の音楽家かもしれない、一流の教育者かもしれない。あるいは、一流の企業人なのかもしれない。

音楽をこんなにも楽しめる4年間はありません。音楽を通じて仲間と共に大いに学び、追及し、一流の人間として世界に飛び立つてくれることを私は願っています。



実現場の環境に4年前倒しで触れられる」という点だと思います。ライブもリハーサル前のドラムの音決め(PA調整)から見学できるようにしています。また、卒業後も大学に来てくれる人が多く、学生たちも大いに刺激を受けています。例えば、招聘講師として、B2のベースも担当していたシンガーソングライターの徳永暁人さんに来てもらったり、東京五輪の曲を書くコンペがあったり、JASRACの野方英樹さんには、デジタル時代の音楽家に必要な著作権の知識を教えてくださいました。

いい意味で「オタク」になる

MP3全盛期の今、CDを買わない人が増えました。CDやレコードを聴かないと、系統的に音楽を聴かなくなり、単に曲を知っているだけになってしまいます。

本コースに入学したいと思っている人には、基礎教養を身につけ、加えていい意味で徹底的に「オタク」になってほしいと常々思っています。そこからいい音楽が生まれるのですから。

考え、知り、 既成概念を覆す

学生時代の僕の周りには優秀な人が多くいて、彼らに負けたくない気持ちで強く芽生えまくった。作曲は習うものではなく、自ら勉強し、曲を書き、先生からほんの少しアドバイスをいただくもの。第一線で活躍中の先生方が僕の曲を聴き、プロの目線でアドバイスしてくれたことは、とてもプラスでした。曲を聴いていただいても、三枝先生からは具体的な指示はないんです。自分で考えなければいけない。「ちよつとい」「三〇面白い」、そう言われるのがうれしく、そのために曲を書いてきたのかもそれません。今思えば、在学中にもっと勉強しておけばよかった。学生時代は

人生で一番時間のあるとき。周囲には、演奏できる器楽専攻の学生がいっぱいいて、資料や楽譜・CDもたくさんある。立派な民族音楽研究所もありながら、卒業して初めて民族楽器を勉強しました。映像と異なり、音楽は嘘をつくことができます。実は「龍馬伝」では、和楽器ではなく、それに似た音を出す民族楽器を多用しています。このように既成概念を壊してこそ、音楽は広がりと興行きを持ちます。

僕たちは、多種多様な人に音楽を届けるのですから、いろいろなことを知り、考え、多くの選択肢を持つていたいと思っています。



佐藤 直紀 Naoki Sato

1993年映画・放送音楽コース卒業。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」シリーズで第29回日本アカデミー賞最優秀音楽賞、第31回日本アカデミー賞優秀音楽賞を受賞。代表作に2012年NHK大河ドラマ「龍馬伝」、映画「永遠の0」「るるろに剣心」「海猿」シリーズ、NHK連続テレビ小説「カーネーション」など。



菅野 祐悟 Yugo Kanno

2001年映画・放送音楽コース卒業。2014年NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の音楽を手掛けている。代表作に映画「容疑者Xの献身」「アマルフィ 女神の報酬」「踊る大捜査線 THE FINAL」、ドラマ「ガリレオ」「SP」【読解きはデザイナーのあとで】など。



大学の授業で、僕にとって一番大きかったのは、毎週毎週、曲を書かされること。今考えると、週1曲なら楽勝です。プロになると1日3曲作れなければなりません。僕は入学直後から、プロの世界の洗礼を受けたわけです。

一番の条件は「情熱」

学生時代は、学内でトップクラスの器楽専攻の学生を、自分よりサテて見つけ出し、自分が書いた曲を演奏してもらったりもしていました。また、クラブでも手いシンガーを見いだしてリモテーパーを作ったり、友達と自主映画を製作して上映したりと、課外活動も積極的にやっていました。これらは、自分がどうしてもやりたいことでした。

この世界でやっていく、一番の条件は情熱です。活躍している卒業生には、皆、情熱があるんです。先生方が現役で活躍されていて、プロフェッショナルな世界を身近に感じとれるからこそ、刺激を感じ、触発されるのかもしれない。

NHK大河ドラマへの挑戦

「軍師官兵衛」の作曲オファーが来たときは、ある種の恐怖感を感じました。小六先生に「書ける人しか依頼されないし、よく書けている」と言っていたら、少し安心しました。

とはいえ、想像どおり大変な仕事で、トータル130曲くらい作り、ポーランドでも録音しました。ポーランドでは言葉も通じず、相手は僕のスコアだけを見て判断する。音楽家としての熱い闘いを経験しました。

作品では官兵衛の愛とインテリジェンス、戦国時代の荒々しさの

音楽世界の洗礼を受けた 学生時代



「龍馬伝」の作曲者、佐藤直紀君は口数の少ないタイプですが、その内側に潜んでいるスコアから発信される音楽には、非常に強いパワーがあります。「龍馬伝」では、西洋音楽の技法と民族音楽の合体による、彼独自の音楽世界が広がっていました。一方、「軍師官兵衛」の菅野祐悟君

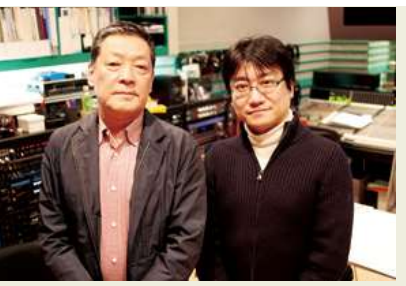
ふたりの卒業生が作曲した、NHK大河ドラマ曲で指揮 教授 広上淳一

の作風はオーソドックスですが「変幻自在」。それは、どんな制約にもアダプトする、作曲家としてのずば抜けた能力と逞しさがあることを意味します。そして、彼は人を惹きつける、魅了する才能も兼ね備えています。この後輩ふたりの天才作曲家の作品を指揮できたことを誇りに思っています。

映画・放送音楽シーンの最前線で活躍する、卒業生たち

【対談】

小六 禮次郎 *Rojiro Konbu*
山下 康介 *Kosuke Yamashita*



1年生の時から毎週曲を書く小六 映画・放送音楽コースのよかったところは？
山下 1年生から毎週曲を書く課題が、今思えばとてもよかったと思います。毎週テーマがあり、曲のジャンルを指定される。最低でも3分前後くらいの曲を毎週書いていました。

小六 今は年間何曲くらい？
山下 今年はテレビ用の劇伴が100曲、映画が4本200曲、実写の映画も4本程度あったので、合計約500曲です。アレンジの仕事もたくさんありました。小六 NHK大河ドラマをやった時、僕は1000曲だった。時代も違うしね……。

長く続く仕事が意味すること
小六 デビュー作は？
山下 大林宣彦監督のテレビドラマ「毛猫ホームズの推理」の劇伴でした。その時は、監督がメモリーを書き、僕はアレンジをやらせていただきました。その後の作品で監督が音楽担当を探してい

た際に、何人か候補がいきましたが、奥さままでプロデューサーの恭子さんが若い僕を選んでもらいました。それ以来、監督は今もこー稽させていただいています。
小六 その話にはとても大きな意味がある。ひとつのきっかけから始まった仕事があります。もちろん相性もあるでしょうが、6回続くということは、山下君にはそれだけ作曲する実力があるという証です。それがなければ決して続かない。そういう意味では、大林監督との最初の出会い、かつ、山下君の音楽的な才能を保證することにもなったと思います。

将来の後輩たちへのメッセージ
山下 僕がこの大学で学んで20年たちました。音楽は、時代ごとに作り方や受け手の聴き方も変わるものです。その点、実際に現役で活動している先生方から、時代に応じた、現場で実用的な知識と経験を直接的に習得できることは、これらと同じ道に進もうとしている人にとって、実に大きなメリットだと思います。

加えて、この大学には、「あの設備を使って勉強したら、社会に出てすぐに仕事ができる」と言ってもよい、非常にハイレベルなスタジオやシステムもあります。現実のスタジオワークの状況変化に応じて、それらの施設や機材も常にプロを目指す人にとっては申し分ない環境が整っている訳です。あとは、皆さんのやる気次第で、いくらでも可能性は広がるのではないのでしょうか。

周防 亮介

Ryosuke Suho



サンクトペテルブルクでの演奏会

された。音楽の家、という組織があります。この音楽の家は、ロシアを中心とした若手演奏家に演奏の機会を提供しています。このたび、アジア人として初めてお招きいただいたのですが、日本から来た無名の若者に耳の肥えたロシアのお客さまがどう反応されるのか、私は不安でいっぱいでした。

お客さまの大歓声に感謝

言葉の面で指揮者やオーケストラの方たちと意思疎通を図ることに苦勞しましたが、表現したいこと、伝えたいことは音楽しかありません。自分がどう弾きたいかが伝わるように、強い気持ちでリハーサルに臨みました。

演奏したのはシベリウスのヴァイオリン協奏曲です。本番はあっという間で、弾き終わって後に待っていたのはお客さまの大歓声。温かい拍手に包まれ、幸せな気持ちになりました。音楽の家の芸術監督にも「ぜひまたこの街に来てほしい」とおっしゃっていただき、安堵と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

言葉は違っても音楽で人はつながれる

演奏後、ひとりのロシア人のおお

あさまが感想を伝えるに楽屋を訪ねてくださいました。音楽は世界の共通語、とよく言われますが、その方のロシア語がよくわからなかった私は、まさにそのとおりだと感じました。言葉がわからなくても、音楽でつながれることをうれしく思いました。

教会で過ごす心安らぐ大切な時間

サンクトペテルブルク以外にも、今年は韓国、オーストラリア、アメリカなどを訪れる機会がありました。あまり観光をする時間はないのですが、空き時間があれば教会を巡っています。クリスマスにはありませんが、実は日本でも演奏会の前日には教会に向かい、「上手く演奏できますように」とお祈りしています。心がとても落ち着くのです。

魅力的な音色を目指して

目指しているのは、最初の音を聴いただけで、誰もがハッとする演奏です。去年までは意識していませんでしたが、海外での演奏会やコンクールを重ねるうちに、強くなるようになってきました。例えばバガニーニなら、一音で悪魔的な何かを感じさせるような……。そういった演奏を目指し、日々努力を重ねています。

演奏会場となったペロセルスキー・ペロセルスキー宮殿



Profile

ヴァイオリン 大学1年
【主なコンクール受賞歴】
■第13回クロススター・シェーンター国際ヴァイオリンコンクール第1位及びヴィルトゥオソ・エ・カメルン賞・EMCV賞
■第4回ドイツ・オーストラリア国際ヴァイオリンコンクール最高位及びスポンサー特別賞
■第9回東京音楽コンクール弦楽部門第1位及び聴衆賞
■第81回日本音楽コンクール第2位
および聴衆賞
他多数受賞
特別特待奨学生、小栗まち絵、大谷康子、原田幸一郎の各氏に師事。

挑戦が豊かな経験になっていく

憧れのコンクールに出場

師事している原田幸一郎先生にすめられて出場を決めました。これまで、国内のコンクールや中国のコンクールには参加していたのですが、大きな国際コンクールもアメリカも初めて。不安もあり、緊張もしていました。それでも参加者の中で最年少でしたし、挑戦者としての気持ちをお忘れずに、自分らしい演奏をしようと前向きな気持ちになりました。

次につながる経験

残念ながらファイナルには進めなかったのですが、何が足りなかったのか知りたくて、審査員の先生



セミファイナリストのディプロマ授与

方に自分からうかがってみました。先生方は私の長所も課題も丁寧に教えてくださり、とても勉強になりました。チャレンジしたことで、次につながる有意義な経験ができたと思っています。これから海外のコンクールに出場したいと意欲がわいてきました。世界に挑戦していくために、さらに精進していきます。



Profile

ヴァイオリン 付属高等学校2年
【主なコンクール受賞歴】
■第9回大阪国際音楽コンクール第1位
■第63回全日本学生音楽コンクール小学校の部名古屋大会第1位、全国大会第1位。併せて東横賞、兎塚賞
■第82回日本音楽コンクールバイオリン部門第2位
■第9回インディアナポリス国際ヴァイオリンコンクール（アメリカ）バガニーニストパフォーマンス賞第2位
最年少セミファイナリストディプロマ取得
特別特待奨学生、中澤きみ子、原田幸一郎の各氏に師事。

辻 彩奈

Ayana Tsuji

インディアナポリス国際ヴァイオリンコンクール

バガニーニストパフォーマンス賞第2位
最年少セミファイナリストディプロマ取得

誰もが感動する演奏を目指して

絶対に負けたくない

ピアノを始めたのは3歳の時です。2つ年上の兄も習っていたので「負けられない」と練習に励みました。小学5年の時に全日本学生音楽コンクール全国大会小学校の部に出場しました。結果は入賞。1位になれずとも悔しかったです。その日から1年間、必死に練習を重ね、翌年には1位。ピアノだけは誰にも負けたくありません。「絶対に1位になる」という思い、いつもコンクールに挑戦しています。

日本人初の1位を獲得

2012年8月にドイツで開催された、第13回エトリング国際コンクールでは入賞を果たしました。世界のレベルの高さには触れられましたが、この時も1位になれず悔しくて仕方ありませんでした。翌年、ウィーンで開催されたロザリ

オ・マルチアーノ国際ピアノコンクールに出場し、日本人初の1位、併せてワグナー・ヴェルディ賞を受賞しました。実を言うと、予選の演奏は「なぜこんなにうまく弾けるのだろう」と自分でも驚いたほど。今までに経験のない、不思議な感覚でした。

音楽に没頭する高校生活

付属高等学校での毎日は、楽しいことばかりです。素晴らしい先生方から学び、同級生や先輩と音楽を話し合えます。文化祭で友達と奏でたブラームスのピアノ四重奏曲は、笑みがこぼれるほど幸せな時間でした。後輩ができる来年の春が楽しみです。ぜひアンサンブルしたいですね。

お客さまと音楽を共有できる、コンサート空間が大好きです。公演を重ねるたびに、誰をも感動させる演奏家になりたいという思いが強まります。



Profile

ピアノ 演奏家コース・エクセレンス付属高等学校1年
【主なコンクール受賞歴】
■第64回全日本学生音楽コンクール小学校の部東京大会第1位、全国大会第1位。併せて野村賞、井口敦子賞、音楽奨励賞、横浜市民賞（聴衆賞）
■第13回エトリング国際コンクール（ドイツ・エトリング）入賞
■第5回ロザリオ・マルチアーノ国際ピアノコンクール（オーストラリア・ウィーン）第1位、併せてワグナー・ヴェルディ賞
特別特待奨学生、松山優香、松山元の各氏に師事。
2013年に、ナカダス・ジャパン株式会社よりデビューアルバム(MAO FUJITA)をリリースし、2014年9月1日～10月31日の期間、ANA国際線の機内オーディオプログラムで放送されました。

藤田 真央

Mao Fujita

ロザリオ・マルチアーノ国際ピアノコンクール

日本人初の1位

日本スペイン交流400周年記念コンサート Celebración del Año Dual España-Japón

スペイン・日本 音楽の対話

—東京音楽大学シンフォニーオーケストラ演奏会—

Concierto de la Orquesta Sinfónica de la Universidad de Música de Tokio



2014年7月25日(金) 18:00 東京音楽大学100周年記念ホール

ダビ・マルティネス・ガルシア(ギター)



完璧なスペイン音楽
スペインの音楽は難しいのですが、東京音楽大学シンフォニーオーケストラが、コンサート本番で完璧なスペインの音楽を奏されたことは、とても驚かされました。同じ目標に向かって練習を積み重ねることに、音楽は人種や文化を超えた会話を可能にさせるということ、あらためて実感させられました。

指揮:アレクシス・ソリアーノ Alexis Soriano
ギター:ダビ・マルティネス・ガルシア David Martínez García
演奏:東京音楽大学シンフォニーオーケストラ

チャピ / 擲弾兵の太鼓(前奏曲)
CHAPI / El Tambor de Granaderos (Preludio)
チャピ / 人騒がせな娘(前奏曲)
CHAPI / La Revoltosa (Preludio)
ロドリゴ / アランフェス協奏曲
RODRIGO / Concierto de Aranjuez
[アンコール]
タレガ / アルハンブラの思い出
TÁREGA / Recuerdos de la Alhambra
トリナーノ / 闘牛士の祈り
TURINA / Oración del Torero
フャリャ / 「三角帽子」第1組曲&第2組曲
FALLA / Sombrero de Tres Picos, Suites 1 y 2
[アンコール]
アントニオ・アルバレス・アロンソ / スペインのための
ANTONIO ALVAREZ ALONSO / Suspiros de España

主催:セルバンテス文化センター東京
東京音楽大学
後援:ターキッシュエアラインズ、スペイン大使館
協力:公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト、三田ワイン

1613年、仙台藩主伊達政宗がスペインのフェリペ三世へ支倉常長を大使とする慶長遣欧使節団を派遣してから400周年を迎えたことを記念して、両国同時進行で開催された「日本スペイン交流400周年」。その一環として、同国の著名な指揮者、ギタリストと、本学シンフォニーオーケストラによる記念コンサートを開催しました。会場にはスペインをはじめ、中南米各国の大使や大使館関係の方々にも多数お越しいただきました。
400年という時を超え、音楽を通じてスペインと日本の情熱的なダイアログが繰り返され、聴衆を大いに魅了しました。

アレクシス・ソリアーノ(指揮)



情熱を持ち続けられ、すべて乗り越えられた
素晴らしいコンサートでした。東京音楽大学の学生の皆さんには、リハーサル時に抱いた「成長したい」という情熱をこれからもぜひ持ち続けてほしいと思います。音楽家というのは厳しい職業です。しかし、そうした情熱があれば、すべては乗り越えられるものなのです。相手に対する尊敬の念を重んじる日本とその文化に、今回いろいろな感心させられました。



(左から)野本 正平 副学長、野島 裕 学長、アレクシス・ソリアーノ、ミゲル・アンヘル・ナ(ロ)・ボルテラ 駐日スペイン大使、野島 裕 学長、エドゥアルド・アスナル・カンボス 特別大使、マノロ・バルンスエラ セルバンテス文化センター東京総合管理部長



(左から)ミゲル・アンヘル・ナ(ロ)・ボルテラ 駐日スペイン大使、野島 裕 学長、エドゥアルド・アスナル・カンボス 特別大使、マノロ・バルンスエラ セルバンテス文化センター東京総合管理部長

菊池 晶子 コンサートミストレス(ヴァイオリン 大学院2年)

**すべてが新鮮だった
スペインの音と人**

普段はなかなか接する機会のない、スペインの音楽。コンサートミストレスの私も他の学生たちも、リハーサル当初は戸惑いと葛藤の連続でした。しかし、そうした不安にもかかわらず、指揮者の熱心な指導により、本番前日には一挙に方向性が見え、オーケストラ全体の一団感を生み出すまでになりました。そして演奏会当日、アランフェス協奏曲が終わった瞬間の静けさの中、ソリストのダビ・マルティネス・ガルシアさんがそっと微笑まれたことは、今でも印象深く記憶しています。
自ら見聞を深め、いろいろな国の音楽を知り、すべてをかみ砕いたうえで、つとアプローチできるようならなるという、課題こそ残りましたが、ベストな演奏だったと思います。

〈2014年夏期 実施概要〉

2014年7月29日～8月10日

演奏会日程

- 8/6 アツピアーノ
- 8/8 ニュールンベルク
- 8/9 バイエルン
- 8/10 スルツバッハーローゼンベルグ

参加人数 13名

プログラム(抜粋)

- 7/29 合奏
- 7/30～8/2 午前 分奏/午後 合奏
- 8/2 指導者コンサート
- 8/4～5 合奏

〈2014～15年冬期 実施概要〉

2014年12月27日～2015年1月7日

演奏会日程(2015年)

- 1/3 ヴァイカースハイム(市庁舎)
- 1/4 バンベルク(ヨゼフカールザール)
- 1/5 スルツバッハーローゼンベルグ(KUKOホール)
- 1/6 エアランゲン(ハインリッヒラーデスハレ)
- 1/7 ミュンヘン(ガスタイク)

※1月24日～ベルリンほか予定

参加予定人数 14名(うち付属高校生4名)



現地での練習風景

この2週間の合宿と演奏旅行を通じて、ドイツの一流の指導者から日本では経験することができないことをたくさん学び、大いに交流を楽しんでもらいたいと思います。



演奏会風景



(右)タニエル・ノーデル(バイエルン放送交響楽団1stヴァイオリン奏者)
(左)水島 愛子(客員教授)

このオーケストラは、ドイツ・バイエルン州が主催する、青少年対象のオーケストラです。バイエルン放送交響楽団のメンバーが主な指導者となり、毎年新進気鋭の若手指揮者を招いて熟演を重ねています。設立当初から約40年間、毎年夏と冬に演奏旅行を兼ねた合宿をしてきました。その目的は、学生に「すばらしいクラシック音楽を演奏したい」と感じてもらう、演奏する厳

しさを知ってもらうこと。東京音楽大学とb1jooは2014年に正式に提携しました。今年の冬は付属高等学校の生徒も含め、14名が参加予定です。彼らは音楽を深く極め、国際的視野を拡大する機会を得るでしょう。音楽は「音」が命です。ドイツでは、子供の頃から好きな音を知り、こたわる環境で育ち、そして各人の個性が形成されていきます。日本はこの合宿に参加する学生にも、私たちの音色に対するこだわりに接し、自分の音を探さずかけのひとならばと思います。日本の学生は指導者の言うことを忠実に守り、努力も怠らないため、技術的な面でも優秀です。そのテクニックを生かす表現方法も、この合宿で学んでもらえたらと思います。オーケストラでは、指揮者の指示はもちろん重要ですが、一人ひとりの奏者が、心に描くイメージから思い浮かべる音を主張、表現し、それがひとつの音にまとまる時に素晴らしい音がなります。符通りにそろって弾くのは「よいオーケストラ」です。しかし「素晴らしいオーケストラ」は、奏者一人ひとりの表現を集約した音を奏するのである。

池田 開渡(ヴァイオリン 大学院4年)

最初はドイツ語がわからず、とても苦労しました。指揮者の言葉を理解できないのかもわかりません。参加4回目の昨年は、先生の指示を理解し、「こう演奏したらどうですか?」と自分の意見を主張できたのが何より嬉しかったです。学生交流の場もあり、鶴の折り方やソウリン節を教えて、ドイツ人の友達もできました。

バイエルン州立青少年オーケストラ(b1jo)合宿 ドイツの音を全身で体感する

東京音楽大学ならではのプログラムです。今回このプログラムのオーデイションに立ち合われた、バイエルン放送交響楽団のタニエル・ノーデル先生にお話をうかがいました。

高校2年の時にひとりで参加し、最初の音で衝撃を受けました。まわりとスレないように弾き始めた私と違い、彼らは自分の音を出すことに集中していました。驚くのは、10代の学生は、指揮者の先生に「私はこう弾きたい」と主張し、先生方も、ひとりの奏者として学生に接していること。よりよい演奏のために意見をぶつけ合う。その結果、素晴らしい音になる。パートごとに分かれ、バイエルン放送交響楽団の先生が演奏する曲ごとに弾き方から指使いまで1週間ほどで、演奏は驚くほど変わりました。



長野県信濃町 第4回 癒しの森コンサート 2014年9月7日(日) 13:30 信濃町総合体育館
 東京音楽大学シンフォニーオーケストラ 長野県信濃小・中学校吹奏楽部 指揮：川瀬 賢太郎 (2007年本学卒業)
 高橋 宏樹 / 勇気のトビラ、J. スウェアリンゼン / MAKE A JOYFUL NOISE!
 J. プラムス / 大学祝典序曲 作品80、R. シュトラウス / 交響詩「英雄の生涯」作品40
 [アンコール] 中野二郎 / 一茶さん / 原島 篤史 (大学4年) 編曲、J. シュトラウス / ラデツキー行進曲

「癒しの森」での文化交流 信濃町の人々と学生をつなぐ、音楽

学生たちによる迫力の演奏が、静かな森に響きわたりました。

深い自然の中で、集中して磨き上げる。「癒しの森コンサート」がスタートして、今年で4回目を迎えました。多くのご協力をいただきながら、信濃町の皆さんにクラシック音楽に触れる機会をご提供できたのは、学生たちにとって大変幸せなことです。

癒しの森には、音楽を邪魔するものはありません。3泊4日の合宿で、学生はただひたすら練習に没頭します。仲間と寝食を共にしながら、必死に練習に励むことで、演奏技術の向上とメンバー同士の団結力が強まっています。

癒しの森コンサート
 オーケストラの授業は4月に始まり、9月の合宿と「癒しの森コンサート」を経て、11月の定期演奏会へ向かっていきます。今回の定期演奏会で指揮をする、神奈川ブルーハーモニ管弦楽団 兼任指揮者として活躍する川瀬賢太郎さんが合宿に参加されてご指導くださったり、指揮者、教員そして学生が一丸となった、必死の練習が続きました。

「一茶さん」を演奏
 コンサートでは、信濃町に生まれた俳諧師・小林一茶にならみ、童謡「一茶さん」のオーケストラバージョン(編曲 原島篤史 作曲 芸術音楽コース4年)を披露し、お客さまに楽しんでいただきました。コンサートでは、何よりもお客さまに喜んでいただくことが大切。定期演奏

■「癒しの森」とは
 信州・信濃町には深い森が広がっています。昔から保養地として愛されてきたこの町が目にしたのが、「森の癒し効果」です。豊かな自然を守ることで、地域住民や観光客に癒しを与える「癒しのまちづくり」を進めており、森林療法によるセラピー効果の研究も行っています。「癒しの森コンサート」はその一環として、「音楽による癒し」を地域住民に提供する目的で企画されました。

会に向け、学生たちもその重要さが実感できたことでしょうか。

オーケストラに必要なこと
 オーケストラで大切なことは、周りの音をよく聴き、パランスを取ることです。自分をアピールするために個人の演奏技術を高めるのは当然のことですが、たとえ卓越した技術をもっていても、調和の取れない人間はオーケストラの一員にはなれないのです。

豊かな自然の中、地域の方々とは交流を通じて調和を学ぶことが、学生たちが調和を学ぶ貴重な経験になりました。(オーケストラ 講座代表 教授 水野信行)

癒しの森にいと、豊かな自然の音に包み込まれます。そして、ホテルの窓の外には神秘的な野尻湖が広がっています。そんな、都会では味わえない環境の中、私の心がゆっくりと研ぎ澄まされていくのを感じました。

3泊4日の合宿で演奏が仕上がることでも不安でしたが、朝の9時30分から夜の9時まで練習し、その後も各パートのトランプで集まり、相談をしながら音を作り上げていきました。合宿を通して、学生間の団結が高まったと思います。

本番では、たくさんのお客さまから拍手いただき、とても温かな雰囲気の中で演奏をすることができました。窓を開けたコンサートは初めてです。つばめが途中に入ってきて、演奏の間ずっと鳴っていました。まるで、本音が森の中で弾いているような気分でした。



野尻湖

上智大学との単位互換制度

現在、出版社の編集部で働く、卒業生の友近祐未さん。上智大学との単位互換制度で学んだことが、就職活動や今の職業に活かせる大きな経験となったそうです。

視野を広げ 可能性を見いだしたい
 東京音楽大学付属高等学校に入学し、将来について考えたのが2年の頃です。その後、大学のピアノ科に進み、音楽に携わりながらも、演奏家ではなく、何か音楽を活かせる職業に就きたいと考えるようになりました。大学3年で就職活動が始まり、まず目指したのはレコード会社をはじめとした音楽系。ライバルは幅広い分野の知識を持つライオンに就職が決まりました。

このままでは戦えない、そう感じた大学4年の時に、上智大学との単位互換制度に申し込みました。

すべてが新鮮だった
 上智大学のキャンパス
 歴史を感じる瀟洒なキャンパス、海外からの留学生たち、その広さに圧倒される図書館。目に映るものすべてが新鮮。雰囲気にはすぐに馴染めました。早速、友達を作ろうと「授業内容について教えてほしい」と話しかけ、ふたりの女子学生と友達になりました。彼女たちとは、今もSNSを通じてつながっています。

先生を質問攻めにし 必死に授業についていく
 私が履修したのは、経済学部の「企業経済論Ⅰ」と「消費者行動論(マーケティング論)」。選択時にはわかりませんでした。マクロ経済とは何かすらわからないという、授業時には毎回テストがあり、予習・復習は当たり前。授業後には積極的に先生のオフィスへ行き、足繁く上智大学の図書館に通い、必死に授業についていきました。

自信を持って臨めた就職活動
 授業についていくのは大変でしたが、上智大学で単位を取得したことは、就職

活動でひとつの大きな武器となりました。企業にエントリーシートを送ると、「音大生が受けにくさ」と目にと留まったので、面接試験まで進めることが多かったです。そこで上智大学での経験を話すと、さらに興味を持っていただけました。結果的には、第一志望だったレコード会社とはご縁がありませんでしたが、音楽や美術の実用書を制作する編集プロダクションに就職が決まりました。

その後、2年半がむしゅらに仕事を覚え、今年の10月に、出版社の西東社へ転職。「読者のニーズは何か」「それを満たすためにはどのような本がよいのか」等、営業と連携をとりながら企画を立てる立場になり、上智大学でマーケティング論を学んだことが、とても役立っています。

あらためて気がついた
 東京音楽大学の魅力
 東京音楽大学をキャンパスの外から見ただけで、気づいたことがあります。それは、東京音楽大学の先生方は、とてもきめ細やかに学生を指導してくださるということ。一般大学に通って、初めてそれが賢いことを知りました。振り返れば、歯を食いしばって経済学を受講し続けたのも、レッスンを控われた根気強さのおかげです。そして、これからの私を支えてくれるのも、きっと音楽を通じて東京音楽大学の教育だろうと思います。

今は、ほんの少し時間に余裕があったので、音楽活動も再開したいですね。



当時の授業プリントとノート



**上智大学 経済学部
 単位を取得できたのも
 東京音楽大学だからこそ
 友近 祐未さん**
 編集者株式会社西東社
 2012年大学卒業ピアノ

■単位互換制度とは
 上智大学で取得した単位が、東京音楽大学の単位として認められる制度です。上智大学での500講座以上が対象となっており、幅広い教養を専門的に学ぶことができます。上智大学の図書館も利用でき、今までとは違う環境で学びながら学生とも交流を図ることができます。また、東京音楽大学でも上智大学の学生が音楽の専門科目を中心に学べる機会を提供しています。 ※2年生以上の全学部生が対象です

東京音楽大学 シンフォニーオーケストラ定期演奏会

壮大なスケールの難曲への挑戦。かつてない高みに到達した喜びがありました



2014年11月28日(金) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール
指揮:川瀬 賢太郎 F.シューベルト/交響曲 第3番 二長調 R.シュトラウス/交響詩「英雄の生涯」作品40



川瀬 賢太郎
(2007年本学卒業)

一人ひとりを演奏者として リスベクトしている

定期演奏会の指揮を務めることになり、年齢も若い僕でいいんですかという気持ちもありました。ですが、教員ではない僕だからこそ、プロの指揮者としての姿勢を見せなければならないと思い、お引き受けしました。

シューベルトの交響曲とシュトラウスの交響詩を演奏したのですが、特にシュトラウスの「英雄の生涯」はとても壮大な曲で、複雑に入り組んだ難曲です。学生たちにとつても僕にとつてもこの曲に取り組むのは大きなチャレンジでしたが、シュトラウス生誕150周年という記念の年に演奏できたのは光栄なことだと思います。

普段はプロのオーケストラの方々と関わる僕ですが、プロであれ学生であれ同じ演奏者と思っ、リスベクトの気持ちを持って指導しています。大切なのは、学生たちが自分のよいところに気づける



コンサートミストレス
福田 ひろみ
(ヴァイオリン 大学3年)

素晴らしいホールで 人生最高の演奏ができました この壮大な曲を演奏すると知っ

こと。人は自分のネガティブなところに目を向けて「ダメだ」と思いがちですが、よい部分に気づいて喜びを感じることも自信につながっていくのです。リハーサルを重ねるほどに彼らの自信が生まれてくるのを感じますし、大学の先生方にご指導いただきながら皆さま成長する姿は頼もしいです。東京音楽大学の魅力のひとつは、挑戦させてくれること。高い壁に挑戦し、素晴らしい音色で演奏できた達成感、学生たちのさらなる成長につながります。多くのお客様さまの前で演奏する機会は「癒しの森コンサート」から定期演奏会を含めて4回ありますが、本番が終わるたびに、豊かになっていく自分たちを発見するでしょう。

(指揮 川瀬賢太郎)

東京音楽大学 シンフォニックウインドアンサンブル定期演奏会

ダイナミックな演奏により総勢150名の心がひとつになる



2014年7月14日(月) 18:30 東京芸術劇場コンサートホール 指揮:津堅 直弘 ユーフォニアム:外園 祥一郎
G.ホルスト/吹奏楽のための第1組曲
C.T.スミス/華麗なる舞曲
M.ケンチビッチ/レジェンド
O.レスピーギ(荻原 明 編曲)/交響詩「ローマの祭」

2014年度全日本吹奏楽コンクール課題曲
I. 中西 英介/最果ての城のゼビア
II. 高橋 宏樹/行進曲「勇気のトビラ」
III. 谷田佳代子/「斎太郎節」の主題による幻想
IV. 小林 武夫/コンサートマーチ「音楽の街で」
V. 谷地村 博人/きみは林檎の樹を植える



津堅 直弘
教授

信頼と愛情がこぼれだす 一体感

総勢150名の学生が一体化した演奏の指揮をすることができ、大きな喜びを感じています。

今回演奏した、C.T.スミスの「華麗なる舞曲」は、もともとテンポ164の速い曲ですが、私がさらに速いテンポを求め、学生たちは練習を積み重ね、最終的にはテンポ200まで演奏できるようにになりました。素晴らしい先生方に各パートの分奏をしっかりとみていただいたことで、アンサンブルに磨きがかかったことも大きかったと思います。

音がひとつの塊となる、客席へ押し寄せる大きな音のために、指揮者と奏者全員との精神的な一体化は必須です。それは教員と学生が、普段から愛情深く、密にコミュニケーションをとっているからこそ成立します。私が指揮する時、どの学生を見ても、その目は私を見つめていました。そして、そこには日頃のコミュニケーションが増っ、お互



外園 祥一郎
客員教授

アンサンブルを学び 人間として成長してほしい

演奏会に出演するには、もちろん個々の努力が必要ですが、加えて、ソロと異なる、アンサンブルではまず調和が重要で、どこで主張するか、またどこで譲るのか、その判断には難しい点も多々ありますが、だからこそ、そこにアンサンブルの醍醐味があります。特に本学の吹奏楽団は通常よりも人数が多く、生み出す音のダイナミックレンジがさらに大きくなるため、よりアンサンブルの重要性が高まるのです。

今回の演奏会では、私もユーフォニアムリストとして参加させていただきました。演奏した「レジェン

ド」は、指揮を務める津堅先生が作曲された作品です。故郷、沖繩の音階を使い、沖繩が歩んできた歴史、周囲の島々の美しさを表現しています。作曲家本人の指揮で演奏できることは、大きな喜びです。

学生たちには、これから社会に出た時も、自分の役割を見だし、周囲と調和しながら成長してほしいと思います。

(ユーフォニアム 外園祥一郎)



インスペクター 櫻井 俊
(トロンボーン 大学4年)

信頼関係を築くことの 大切さを学んだ

インスペクターとして目撃したことは、メンバーに声をかけることでした。きっかけは、津堅先生がおっしゃった、「知らない相手を信頼できないだろ」という言葉です。日頃の学生生活でお互いの距離を縮め、打ち解け合えば、演奏する時に音でお互いの気持ちを交わすことができるようになると思います。ちょっとした会話でも、みんなの気持ちをひとつにするチャンスが生まれると思うんです。

本番中、「このメンバーで演奏できるのはもう最後なのか」という思いが、熱くわき上がってきました。指揮をする津堅先生の視線、ソリストの外園先生の音から、これからの将来への励ましを感じました。

た時は驚きましたが、挑戦してみたいと思いました。川瀬先生は身体全体を使って指揮をされるので、先生の手から音楽がふれ出るように。本番では音階以上に豊かに表現され、私たちの演奏も一体化していったと思います。

各パートが複雑に絡み合う部分では、遅れ気味にならないように、コンサートミストレスとして私は背中を使って必死に合図。みんなが自分の動きを見つけていることが感じられて、演奏が終わったとき、無事に大役を務めることができたとホッとしました。

「英雄の生涯」のソロを弾けるのは一生に一度あるかないかのチャンス。緊張しましたが、一番後ろの席まで心と音を届けようという気持ちで演奏しました。

大勢のお客様まで埋め尽くされた東京芸術劇場のホールは、音の響きが素晴らしいんです。この大舞台で、川瀬先生と仲間たちと一緒に最高の演奏ができ、涙が出そうなくらい感動しました。

この貴重な経験を持てたのも、多くの先生方からの熱い指導とアドバイスのおかげだと感謝しています。

東京音楽大学合唱団が合唱共演 日本フィルハーモニー交響楽団 第363回名曲コンサート

マーラーの合唱曲は、プロの合唱団向けの曲で、学生が歌うには難しい仕掛けがあります。授業ではドイツ語の発音から、聞こえるか聴こえないかの小さな声、オーケストラの音量を超える大きな声の出し方を指導しました。そうしたテクニックはもちろん、マーラーが要求する「一人間への理解」も必要です。そこは、人生と問への答えを得ない真の学びが要求され、そうし



た下準備をするのが私の役目です。
リハーサルから本番までの仕事を目的にします。準備期間が短く、もう本番かという不安に思ったかもしれませんが、それがプロの世界。それこそが、学生に身をもって体験してほしいところです。小林研一郎先生の指揮により、本番は素晴らしいものになりました。これからも合唱の醍醐味をぜひ味わってもらいたいと思います。
(合唱指導 阿部純)

2014年11月1日(土) 14:00 サントリーホール
指揮：小林 研一郎(名誉教授)
G.マーラー / 交響曲第2番「復活」



インベクター
中野綱与(工学3年)
憧れていた、オーケストラとの共演。阿部先生の授業は厳しく、ドイツ語の発音や、細かな音程の調整を繰り返しました。本番当日のリハーサルで、一流のオーケストラの生演奏を聴いた時には圧倒されました。そして強く感じたる力。すべての音を聴き、こんなにも的確に指示を出しているのかと初めて知りました。本番はあつという間に過ぎていきました。終わりが近づくころには涙があふれそうになり、全身が震えました。ホールに響く拍手と「ブラボー」の声は忘れられません。声楽を勉強してきて本当に良かったです。

学年・コースの枠を超えて すべての学生にチャンスが与えられる

本学主催の「東京音楽大学コンクール」の「声楽部門」「ピアノ部門」が100周年記念ホールで開催されました。このコンクールは、学生の演奏意欲と演奏・表現技術の向上を目的とし、学生の意識を活性化するために始まりました。

大きな特徴は、東京音楽大学に在籍していれば、付属高校生から大学院生まで、学年やコースの枠を超えて誰でも応募できること。また、学生には世界に目を向けてほしいという思いから、国際的にも活躍している学外の演奏者・指導者の先生方に審査をお願いしているところです。予選・本選を通じて審査員の先生方から丁寧な講評をいただけるのもうれしいことです。これまでの入賞者は、今後も多くのコンクールに入賞するなど、さまざまな場で活躍しています。2015年には「弦楽器部門」「管打楽器部門」が行われます。



審査員による講評

声楽

第1位 横山 和美(大学4年)
第2位 砂田 愛梨(大学院2年)
第3位 大田原 瑠(大学3年)

入選:山田 花織(大学院2年)
入選:若狭 彩香(大学院2年)

声楽子選参加者29名

予選:2014年11月7日(金)
本選:2014年11月13日(木)
100周年記念ホール

- 審査員長・学長 野島 稔
- 審査員(五十音順・敬称略) 植田 克己、プロニスワヴァ・カヴァラ、アヴォク・コムジャン、エリック・タバスティエルナ、野原 みどり

ピアノ

第1位 坂本 文香(大学院1年)
第2位 中平 優香(大学2年)
第3位 鶴澤 奏(大学2年)

入選:中川 真耶加(大学3年)
入選:井上 陽南子(付属高等学校3年)

ピアノ子選参加者24名

予選:2014年11月6日(木)
本選:2014年11月14日(金)
100周年記念ホール

- 審査員長・学長 野島 稔
- 審査員(五十音順・敬称略) 植田 克己、プロニスワヴァ・カヴァラ、アヴォク・コムジャン、エリック・タバスティエルナ、野原 みどり

■賞金:〈第1位〉35万円 〈第2位〉10万円 〈第3位〉5万円

第13回 東京音楽大学コンクール

弦楽アンサンブル演奏会

弦楽四重奏を専門とする弦楽器奏者は別ですが、例えばオーケストラに入団した場合は、弦楽四重奏を演奏するチャンスはほとんどありません。そのため、学生時代は有名な弦楽四重奏を演奏することは、とても貴重な経験になります。
実は、今回のプログラムを決める際には、すごく心配しました。チャレンジだと思い、踏み

切りましたが、シューベルトの作品は本当に難しいです。途中までは「大丈夫か?」と思いましたが、学生たちが主体的に分業練習をしていました。その結果、最終的に非常に上手に演奏になったと思います。トップに座る学生が皆を引っ張ってくれたことが、非常に大きかったと思います。それにつられて後々の学生たちもよく頑張りました。(特任教授 原田 幸一郎)

2014年10月18日(土) 17:00 東京音楽大学100周年記念ホール
指揮：原田 幸一郎(特任教授)
W.A.モーツァルト / デシヴェルティメント 二長調 K.136
D.ショスタコーヴィチ 室内交響曲ハ短調 作品110a(バルシャイによる弦楽四重奏曲 第8番からの編曲)
F.シューベルト / 弦楽四重奏曲 第14番 二短調 D.810「死と乙女」(マーラーによる弦楽合奏版への編曲)

出演した学生のコメント

- シューベルトの作品は、もともとは弦楽四重奏を大編成で演奏したため、パートで合わせるのにも苦労しました。
- 弦楽アンサンブルの授業のレベルが高いことは聞いていたのですが、1年生の自分が履修できるとは思いませんでしたが、上手に弾かれる先輩たちに、すごく刺激を受けました。
- 原田先生から「まだ学生なんだから、やりたいように演奏して大いに楽しんできなさい」と言われたのが印象的で、楽しみながら演奏できました。
- オーケストラとソロとも違う、弦楽アンサンブルにしかない空気が学べて、いい勉強になりました。

2年間積み重ねてきた成果がここにあり

大学4年間で2回挑戦し、私の中で大きな存在となったコンクール。応募の際には自分で選んだ10曲中提出できていたのですが、2年前はすべて歌えるようにするだけで精一杯。それでも第3位に選んでいただけたのは、勢いもあつたのかも知れません。
3年生になり、イタリア語やドイツ語の歌詞研究の授業で歌詞を深く理解するようになり、舞台基礎演技法の授業ではオペラの登場人物の内面を表現

自分を鍛えるために目標を決めて頑張る場です

2年前に挑戦した時は本選に残れず、心構えも準備も足りなかったのが歌に表れてしまったと反省。悔しさをバネに、この2年間は小さな発声のブレであろうと、目の前の問題に対して真剣に取り組んできました。今回は半年前から歌う曲を決め、計画を持って準備を行い、なるべく喉を休ませたり、食生活にも気をつけたり、コンディションを万全にして臨みました。自分の精神をどれだけコントロール

頑張るほどにチャンスが巡ってくる

2年前にも1度挑戦したのですが、その時は緊張し思うように弾けず、本選に進めませんでした。全思い返せば、準備や意気込みもまったく足りなかったと思います。今回はこれが最後のチャンス。1位を目指して準備を進めてきました。師事している先生方のレッスンでは、本選の1時間のプログラムを通して何度も聴いていたとき、体力面での不安を取り除くことができ、結果は第1位。この2年間、意欲を燃やしています。

声楽部門 第1位 横山 和美 (大学4年)



声楽部門 第2位 砂田 愛梨 (大学院2年)



ピアノ部門 第1位 坂本 文香 (大学院1年)



夏の合宿

長野県上水内郡信濃町

東京音楽大学ならではの合宿。
豊かな自然に囲まれながら地元と交流し、学生同志の絆も一層強まりました。

オーケストラ

2014年9月4日(木)～7日(日)

静かな自然の中で集中して練習。とてん音楽に向き合う4日間でした。

音楽漬けの4日間といえる合宿でした。最終日に「癒しの森コンサート」で演奏を行うのですが、それまでの3日間でお客さまに聴いていただくレベルに仕上げなくてはなりません。睡眠と食事の時間以外は



ひとりハートをしていよう感覚でした。豊かな自然に恵まれた静かな環境で集中して音楽に向き合えるのはとてもありがたいことです。はじめは分業で練習を行い、その後全体で合わせました。分奏することでもパートごとの音の流れがつかみやすくなるのです。合宿ではそういった基本的ですが一番大切な練習を積み重ねていきました。練習後もみんなで演奏について話したり、学生たちが頑張っているのを間近で見たりと僕も真剣でした。寝食を共にしながら集中していくことで、気持ちが高揚していき、どんどん演奏レベルが上がっていききました。「癒しの森コンサート」では地元の方々にも喜んでいただけました。まだまだ未熟な部分もありましたが、3日間で仕上げたことが学生たちの自信になっています。自然豊かな環境で音楽だけに集中できるこの合宿。授業の一環として素晴らしい体験ができる、東京音楽大学の学生たちはとても恵まれていると思います。(指揮 川瀬賢太郎)

ピアノ

2014年9月1日(月)～4日(木)
参加人数/教員...8人
学生...1年生40人/2年生10人/3年生6人/4年生18人/大学院1年生10人

今年初めての試みです。普段のキャンパスでは味わえない、ゆったりとした時間を過ごしました。

広がった学生交流

楽器の特性上、ピアノ科の合宿は、他にあまり例のないユニークな企画だと思えます。ピアノの指導はマンツーマンのレッスンの機会が少なくなるため、同学生同志でも、交流の機会が少なくないが、参加者の約半数が新入生で、アンケートでは、大多数の学生が「友達になれてよかった」「先生や先輩・後輩と話すことができてよかった」と回答しています。

門下の枠を超えたレッスンの意味

合宿でのレッスンは通常の担当教員別ではなく、敢えてランダムにグループ分けをしました。学生にとっては、教えていただいたことのない先生からの視点でレッスンを受けられるというメリットがあります。今回はワルシャワ音楽大学のマリア・シュライバー先生も含め、7人の先生が参加しましたが、レッスンはすべて他の学生に少聴講可としました。学内では見る機会が少ない、さまざまな先生方の指導法と触れ合いながら、「他を見て己を知る」、とてもいい体験だったと思います。

自然の中で弾くピアノ

宿泊ホテルの近隣は、ヨーロッパの美しい森を知る、シュライバー先生をも魅了する「癒しの森」。学生たちも大いに癒され、感動したようです。日常の喧騒を忘れさせてくれる信州信濃



中井 賢斗(大学1年)
合宿に行く途中に「欠員が出たので演奏会に出演するように」と、突然言われた時にはとても驚きましたが、演奏会に向けて一晩中練習しました。森の癒しは、演奏者にとって必須の、想像力や集中力を鍛えることができると思います。

幾世 彩花(大学1年)
この合宿中は時間に追われている感覚がなく、ゆったりと過ごすことができました。目を閉じると、周りの音や風、木々が揺れる音が聴こえてくる…。自然が私の身体と心を癒し、潤してくれるのが実感できた4日間でした。

教職課程管弦楽・吹奏楽

学生たちに立派な教員になってほしいという思いと、授業・合宿の意義をうかがいました。

40年以上の歴史を持つ授業

「教職課程管弦楽・吹奏楽」の授業は、今から42年前に「これからの音楽指導者は、ピアノだけ弾ける、歌だけ歌えるのでは不十分」という考えのもとに開講されました。学生は自ら選んだ自分の専攻以外の楽器で管弦楽・吹奏楽を2年間経験します。このような授業を、これほど長期間にわたって続けているのは珍しいと思います。本学の特色ある講座の一つでもあります。また、毎年、1学年100名以上の学生が履修しており、自主参加ながらも、ほぼ全員が参加する夏期強化合宿も、約40年間、毎年実施。学生たちはその4日間の猛練習で、自分の楽器の演奏技術は飛躍的に向上し、一方仲間と団結・協調する意味を学びます。

演奏できない人の気持ちを理解する

この授業で学ぶ重要なことのひとつは、「楽器を演奏できない人の気持ちを知る」とことです。すべてのパートごとに専門の先生方が指導につきますが、初めて触れる楽器を担当する学生が大半で、その演奏は正直言ってうまくはありません。ところが、彼らはもちろん楽譜は読め、理想的な音は頭の中で鳴っている。そのため学生たちは「なぜこんな音しか出ないんだ」とシレンマに陥ります。しかし、その経験こそが貴重です。将来教師になってから、生徒に対して「なんで弾けないの?」という気持ちで接するのはなく、初めて触れる楽器の難しさがわかって、「私も初めてチェロを弾いた時は下手だったな」と、生徒の気持ちを理解できる教師になることが大事



なので、うま可能性をどのよう伸ばすか、それを自らの経験で知ることだとも思います。また、各パートごとに一流の演奏者が指導するため、その楽器を持つ本物の音を身近に体感でき、これを知っておくことも重要です。

演奏以外に多くを得る

この授業で、学生は演奏以外にも多くのことを学びます。夏期強化合宿、芸術祭、定期演奏会、修了演奏会などの役員や「係り」につき、企画・運営、楽器の手配・宣伝、会計報告まで、すべてを各々担当の教員の指導のもと、お互いに協力し合います。音楽大学生ですから、楽器や楽譜についての基礎的な知識・理解は当然あります。しかし、実際の教育現場には、知らなければ苦労する、多くの仕事を受け付けています。「チラシやプログラムの作り方」「予算管理」「ステージマネジメント」など、実践的なことを一から学べるのも、この授業の特徴です。また、さまざまな専攻の学生たちがひとつの管弦楽や吹奏楽を形成し、合宿を経験



取材教員
野口 芳久(指揮)
田代 俊文(指揮)
加納 明洋(指揮)
升谷 直嗣(ヴァイオリン)
大澤 和幸(低音楽器)

することで、たくさんの横のつながりができます。これは学生たちにとって将来にわたる大きな財産になりました。この授業を履修した多くの卒業生が、現在、教育現場の最前線で活躍しています。彼らはこの授業をとおして、児童・生徒の気持ちを知る術を得て、実践力を身につけ、仲間との団結力の大切さを知りました。

努力をすれば必ず「チャンス」をもらえる

Kyoko Kurise
海瀬 京子さん
2010年大妻業ピアノ演奏家コース
2010年大妻業ピアノ演奏家コース
(ルビ)大妻業大学大学院在籍中



トッパンホールでのリサイタル

ドイツに来て6、7年。現在、ベルリン芸術大学大学院に在籍しています。高校から9年間師事した播本枝末子先生に勧められた、ラビツカヤ先生がそこにいらしたことが、選んだ理由でした。

付属高等学校時代から、私の学年は特に優秀な人が多く、「どうしよう」と不安に思うことも多々ありましたが、それでもピアノを続けてこられたのは、人間的にも育ててくださった恩師の存在が大きいです。レッスンは、毎回行く前におなかが痛くなるくらい緊張しました。本番よりも先生の前で弾くほうが怖いくらいの厳しさでレッスンしていただいたので、どんな成長していったのだと思います。先生がくださったエネルギーは、本当にすごかったです。先生から100%どころか1000%くらいズドンと身になるアドバイスをいただき、毎回へこみましたが、その一言で気づくことは多かったです。

一方、先生は、努力すれば必ずチャンスと与えて下さいます。私も、さまざまなおアディションを受け、たくさん舞台を踏ませていただきました。そこで評価されることで自信がつき、具体的な目標が見えるようになります。よきライバルに恵まれたことも、私にとっては大きな強みとなりました。

ゆったりと流れるベルリンでの時間

日本では9年間、伊豆から新幹線通学をしていたので、平日は数時間しか練習できず、その分週末は猛烈



現在の師、マルクス・グロー先生と

習という日々。しかし、ベルリンに留学してからは、公園や街中を散策したり、さまざまなコンサートを聴きにいったりと、ゆったりとした時間の中でじっくり勉強できるようなり、日本にいた頃と比べ演奏イメージの幅も広がりました。

今、東京音楽大学を目指し頑張っている高校生の皆さんには、決して音楽だけでなく、本を読み、ニュースを見聞きして、世界のあらゆることに目を向けてほしいと思います。音楽は、歴史や文化と連動しているもの。演奏上のヒントは、そこにいるも。転がっているものです。それらをどう見だし、自分の「引き出し」にしていけるかは、自分次第です。



『Profile』
播本枝末子、倉沢仁子、故E.ラビツカヤ、M.グロー、G.サヴァの各氏に師事。東京音楽大学付属高校ピアノ演奏家コース、同大学を経て同大学院修了。現在ベルリン芸術大学Konzertexamen課程に在学中。
2005年日本音楽コンクール第1位、2010年A.シュナーベルコンクール第1位、ポルト国際音楽コンクール第3位、2012年A.スクリャーピン国際コンクール第2位、東管、東京フィル等と共演多数。平成19年度~平成22年度(財)ロームミュージックファンデーション奨学生、平成24年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修員。

音楽と向き合って出会えた自分

Yunoko Shiozaki
塩崎 智子さん
弁護士

2010年大妻業ピアノ演奏家コース
2012年京都大学大学院法学研究科修了
同年司法試験合格

恩師、播本先生との出会い

中学3年の夏、地元・福岡のピアノコンクールに播本枝末子先生が審査員としていらしたのが先生との出会いでした。播本先生の公開レッスンを受けて、先生の音楽、そして人間性に強く惹かれ、もつこの先生に教わりたいと思いました。その頃は音楽科が普通科か進路を迷っていたのですが、このレッスンをきっかけに音楽をやりたいと決意。私の方から播本先生にお願いして、福岡から東京まで、1、2か月間1度レッスンに通うことになりました。厳しいレッスンでしたが、先生の下で懸命にピアノと向き合いました。

音楽の道を離れる決意

福岡女学院高校音楽科を卒業後、播本先生が教授を務めていらつしやる東京音楽大学に入学。ピアノを弾くのはとても楽しかったのですが、同期や先輩の優秀な方々の演奏を聴いて、自分の力を客観的に見つめる機会が増えました。播本先生が「音楽以外にも社会的な使命を果たせる道がある」と言われていたこともあり、私が自分らしく生きていく道は、音楽だけではないのかも



播本先生とフィンランドにて(2007年)

ないと思うようになりました。後から思えば先生は進路に思い悩む私に気づいてくださったのが幸いです。大学3年生の時、先生が審査員として行かれるフィンランドの国際コンクールに「あなたも来る」とお誘いいただき、同行しました。コンクールで世界レベルの演奏を聴くうちに、音楽は好きだけれど、自分には音楽以外にもっとふさわしい別の道があるのではとの思いが大きくなりました。この頃、フィリピンの子どもを支援する団体で通訳ボランティアを始めたのも、一つの転機でした。団体に関わる弁護士が熱心に動かれている姿を見て、私も弁護士になって人の役に立ちたいという気持ちわがわが湧いてきました。

音楽を学んで来たから苦勞と感じなかった

先生にはピアノをやめるとずっと言い出せずに悶々としていたのですが、意を決して「弁護士になりたい」とお伝えした時、先生は意外にもとても喜んでくださいました。自分の進むべき道を見つけた私を理解して応援してくださいったのがうれしく、私は先生の大きな愛情を感じました。音楽を学んで来たから苦勞と感じなかった。大学4年生になり、卒業試験に向けての準備と並行して法科大学院進学のための勉強を始めていた。播本先生には、推薦状を書いていただくなど精神的にも支えていただきました。東京音楽大学卒業後、京都大学大学院法学研究科に進学し、3年間学び、1回目の受験で司法試験に合格することができました。司法試験合格を報告したときの播本先生の喜んでくださった声は忘れられませんが、司法試験の勉強は大変でしたが、少しも苦勞とは感じませんでした。長年、真摯にピアノに向き合ってきたことで、精神的にも鍛えられていたのだと思います。

実は司法試験の勉強中、ピアノは一度も弾きませんでした。自分で選んだ道とはいえ、どうしても音楽を挫折したという思いがあったのかも知れませんが、合格後はまた無性にピアノが弾きたくなり、今は学生時代とは違う感覚で音楽を楽しんでいます。音楽に没頭した長い時間があって、音楽の喜びも厳しさも知りました。その過程を経て自分の進むべき道を見つけ、今の私がいる。今後は、弁護士としてみなさまのお役に立てるように全力で取り組んでいきたいと思えます。

播本 枝末子先生から門下生2人へのメッセージ



音楽を学ぶことを通じ、自らの「使命」を果たす

「人は誰でも生きる意味、使命を持つて生まれている。それを探し出すのが大学時代であり、他者を助けられる強くて優しい人になってほしい」と言っただけにして来た学生たちは、それぞれ遅く社会で生きる人間に成長してくれました。なかでも海瀬さん、塩崎さんは兄事的大学時代にそれぞれ自分の進むべき道を定め、全うした人たちです。海瀬さんは高校時代にめきめきと頭角を上げ、コンクールを制覇するピアニストに成長。迷いなくピアニストとしての道を選択してドイツに留学、現在も世界を視野に模索し続けています。塩崎さんは3年生の時に私のフィンランド行に同行し、それをきっかけに将来を考え悩んだ末に、「音楽では自分の使命を果たすことができない。音楽を諦め、人々を助ける弁護士になりたい」と決意。私は驚いたものの彼女の人柄がよく知っていたので、彼女に胸が熱くなりました。その後、卒業実技試験の準備と並行して法律の勉強をした彼女は、驚くほど調子を整え、司法試験にも1回で合格、弁護士としてのスタートを切りました。彼女にとっては法律の勉強の方がやさしかったようです。音楽の修業で培った能力をもとに社会で力強く生きる彼女たちを誇りに思い、心からのエールを送り続けたいと思います。



卒業生インタビュー



客室乗務員になりたい

川脇 かれん

(ピアノ2015年3月大学卒業予定)
全日本空輸株式会社 客室乗務員内定

私がピアノを始めたのは4歳の頃です。東京音楽大学に入学した当初は、音楽のことしか考えていませんでしたが、大学3年になり将来を意識した時に「客室乗務員になりたい」という気持ちが強くなりました。

ピアノストと客室乗務員は分野こそ違いますが、お客さまに喜んでいただく、という点で共通しています。ピアノのレッスンを通じて「どうしたらお客さまが感動する演奏ができるのか」をずっと考えてきました。ピアノで培ってきた能力が、客室乗務員にも生かせると思いました。

音楽が成長させてくれた

大学での経験は、就職活動で自信を持って語ることができました。例えば、震が岡・飯野ビルのエンタランスロビーで行ったランチタイムコンサート。どうすればお客さまに立ち止まってもらえるかを考え、

誰もが一度は聞いたことのある「トルコ行進曲」や「エリーゼのために」などで構成し、演奏しました。初めのうちはまばらだったお客さまも、最後には200人ほど集まりました。

こうした一般の大学では得られない体験が採用担当者の印象に残り、志望していたANAの内定をいただくたではないかと思っています。

東京音楽大学で学べたよかったです

東京音楽大学に入学し、本当によかったと思っています。よい先生に巡り合え、教養も身につけられます。音楽で学んだことは客室乗務員になっても絶対に生かされると信じています。進路に迷っている高校生は、後悔のない道を選んでほしいですね。大好きな音楽を続けながら、自分のなりたい道を目指してください。

家族全員が卒業生

大学で出会い夫婦になる人は珍しくありませんが、これほどの東京音楽大学ファミリーにはなかなかお目にかかれませんが、小熊克宜さん・智子さんご夫婦は、おふたりだけでなく克宜さんのご両親と智子さんのお母さまの5人が本学の出身です。みなさん、それぞれの形で教育に携わっています。

生徒たちが楽しんでくれるそれが最高の幸せ

中学の音楽教師として働く克宜さんの指導方針は、とにかく楽しく。「先生、楽しかったよ。」の声が高にうれしいです。吹奏楽部の顧問をしています。部活は音楽を教えるだけの場ではありません。音楽を楽しむためのサポートがすべてです。

一方、幼稚園の先生をされている奥さまの智子さんも、子どもの喜ぶ姿が一番うれしいと言います。「これがクラリネットの音だよ」と吹いて教えると、本当にうれしそうに笑顔を見せてくれました。

音楽教師に必要なのは、音楽性と人間性のバランス

川越市教育センター長を務めるお父さまの利明さんに、音楽教師に必要なことを尋ねると「音楽的な専門性と人間性のバランス」とのこと。「音楽の魅力を目の前で示してくれる専門性と、厳しくも温かな人間性を兼ね備えた教師は、生徒からすると大変魅力的です。どちらか一方ではなく、バランスが重要です」

本学の、教職課程音楽・吹奏楽を、教育者として成長できる授業だと評してください。

私たちが、教育の道を行く 東京音楽大学ファミリー

- 小熊利明さん** 1986年大学卒業フルート 川越市立教育センター所長
- 小熊克宜さん** 2011年大学卒業音楽教育技術修士(スレソ) 埼玉県入間市立東金中学校教諭
- 小熊洋子さん** 1989年大学卒業ピアノ 森村学園幼稚園教諭
- 小熊智子さん** 2010年大学卒業音楽教育 01年大学院修了 森村学園幼稚園教諭
- 鈴木悦子さん** 1981年大学卒業ピアノ 1987年大学卒業ピアノ

ご両親の利明さんと洋子さんは、大学のヨーロッパ演奏旅行をきっかけに親交を深め、結婚に至りました。洋子さんは現在、ご自宅でピアノ教室を開いています。毎年の発表会では克宜さん・智子さんも出演し演奏や歌を披露しているそう。智子さんのお母さま、鈴木悦子さんもピアノ教室をされていた時期があります。まさに根づいた音楽一家です。

音楽で結ばれる家族

ご両親の利明さんと洋子さんは、大学のヨーロッパ演奏旅行をきっかけに親交を深め、結婚に至りました。洋子さんは現在、ご自宅でピアノ教室を開いています。毎年の発表会では克宜さん・智子さんも出演し演奏や歌を披露しているそう。智子さんのお母さま、鈴木悦子さんもピアノ教室をされていた時期があります。まさに根づいた音楽一家です。

芸術祭で初めて響いた 学生オーケストラ・合唱の音色

「実は、芸術祭で学生による合唱付

家族で奏でるアンサンブル

ご家族全員が口をそろえるのは、「東京音楽大学の先生方は、愛情を持って、しっかりと教えてくれた」ということ。その伝統が、親子二代にわたって続いていることに驚かされます。

克宜さん・智子さんご夫婦は、卒業後も恩師・大澤和幸先生が指揮する吹奏楽団にエキストラとして参加しています。毎週日曜の練習がよい息抜きになっているそうです。

東京音楽大学出身の小熊ファミリーのアンサンブルは、これからも続いていきます。



(左から)小熊 洋子さん、小熊 利明さん、小熊 克宜さん、小熊 智子さん、鈴木 悦子さん

卒業生インタビュー

INTERVIEW

〈2015年度〉4年生の就職内定企業一覧

全日本空輸株式会社	1名	三菱倉庫株式会社	1名	株式会社ジェイアール西日本フードサービスネット	1名
東京地下鉄株式会社	1名	株式会社かねまつ	1名	株式会社アクア・グライエ	1名
三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社	2名	株式会社 ナムコ	1名	株式会社ストンプ・スタンプ	1名
株式会社三井住友銀行	8名	日鉄住金ドラム株式会社	1名	トランスコスモス株式会社	1名
三井住友海上火災保険株式会社	1名	ディーゼルジャパン株式会社	1名	スポーツクラブNAS株式会社	1名
SMBC日興証券株式会社	5名	株式会社河合楽器製作所	1名	株式会社さなる	1名
SMBCフレンド証券株式会社	1名	郵船コーディアルサービス株式会社	1名	ソフトウェア情報開発株式会社	1名
丸三証券株式会社	1名	株式会社バンダイナムコゲームス	1名	ビートレンド株式会社	1名
明治安田生命保険相互会社	2名	コムテック株式会社	1名	株式会社コーエーテクモホールディングス	1名
第一生命保険株式会社	3名	カネボウ化粧品販売株式会社	1名	株式会社マミー・インターナショナル	1名
富国生命保険相互会社	2名	株式会社キャリアバンク	1名	株式会社クリエイティブジャパン	1名
日本郵便株式会社	1名	株式会社ヴォートル	1名	フルラジャパン株式会社	1名
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	1名	東日本ガス株式会社	1名	株式会社アズバートナーズ	1名
戸田建設株式会社	2名	株式会社 USEN	1名	社会福祉法人 敬愛会	1名
株式会社 高島屋	1名	ペイクルーズグループ	1名		

(2014年11月末現在)

魅了した6人の演奏家によるアンサンブル

第6回 音楽教員によるコンサート—ブラームスの夕べ—



小森 輝彦 准教授
バリトン

ブラームスには厳格な交響曲のイメージが強く、今回演じたワルツにはなじみがない人が多いかもしれませんが、ドイツ歌曲に関心がある人にはとても愛着のある作品です。私は今回のコンサートで、それらの隠れた曲を紹介し、私たちができるアンサンブルを表現したいと考えています。

日本人のアンサンブルは、「重唱」というよりは足並みをそろえるのが大事な「合唱」的な方向に向かっています。もともと自己表現が控えめなうえ、無意識のうちに、ひとりだけ飛び出さず、空気を乱さない。その音楽はきれいです。演奏者の心情は意外と伝わらないのです。特に歌曲の場合、さらにおとなしくなりがちなため、私はどうしてそれを避けたかった。私の中で目立たないように歌うより、多少でこぼした音楽でも自己主張したほうが良いと思うのです。メンバー全員で丁寧なアンサンブルを目指し、よく話し合っていました。



秋原 みか 講師
ソプラノ



藤井 奈生子 講師
メゾソプラノ

ブラームスの歌曲は、ロマンチックで重厚な、ドイツらしい音楽です。イタリャオペラのような華やかさはなく、演奏される機会も少ないため、多少の戸惑いはありました。しかし、互いにドイツ語圏での留学経験もあって、



高橋 淳 講師
テノール

お互いの音楽や存在、そのバックボーンをリスペクトし、信頼し合うことなしに、アンサンブルは成立しません。いくら声がよく、ドイツ語の発音が完璧でも、それなしに自分の主張を強引に押し通せば、アンサンブルにはなりません。逆に本番中、会場全体の雰囲気やメンバーの様子を察して、リハーサルではやらなかったことをやったとしても、お互いがわかり合っていれば、「あなたがそうするなら、私はこうする」という「会話」が生まれます。

今回の演奏では、6人の会話の矢が、常に一点に向かって集中していました。練習時には見えなくても、本番で突然現れる想定外のよきはたくさんあるものです。ただ、それらも会話があったからこそ。今回は、本番でしか起こらなかったことがたくさんありました。まさに本番は何にも勝る「教科書」なのです。

学生たちには、音楽を通じて「人間同士のアンサンブル」を知ってほしいと思っています。アンサンブルはひとつの「社会」です。その意味を学ぶことは、人間の生き方を学ぶことに通じます。そうしたことを学生たちに伝えたいと思っていましたし、その目的は果たせたと思います。

験もあることから、合わせを進めるうちに、音楽や言語に対する感覚や価値観、アプローチの仕方を理解し合えました。

アンサンブルは音楽の重要な基礎のひとつです。ソロとは異なり、あまり個性が前に出すぎてはいけません。今回演奏した6人はそれぞれの個性がとても強いので、当初は少ない練習でアンサンブルをつくり上げられるか不安でしたが、実際には、練習するほどに楽しさが高揚していきました。とはいえ、他にも

のパートの音を同時聴きながら連続して歌うため、強い集中力と体力が求められます。それは大きなチャレンジでもありました。

本番では演奏者全員の「いいものを伝えたい」気持ちが一層強くなり、表現出来たのではないかと思います。東京音楽大学は、とても家族的な温もりと、学生を縛らないレベルな環境があります。先生同士も仲が良く、いつも「東京音楽大学を盛り上げていこう」と職員の方々と一丸となって考え、行動されている。

この大学にはそうした「家族愛」があります。そして、そうした愛があれば、この日のアンサンブルも成功しなかったでしょう。ひとりだけいい思いをしように考えると、アンサンブルは壊れてしまいます。そうした意味では、東京音楽大学から得たものが、今回のアンサンブルにも大いに生きていっていると思います。これから入学される皆さんにも、この大学の環境を積極的に利用していただき、人生のアンサンブルを奏でほしいと思います。



2014年9月13日(土) 16:00 東京音楽大学100周年記念ホール
愛の歌(18のワルツ集)作品52 新・愛の歌(15のワルツ集)作品65 ほか

一人の作曲家を深く伝えられるコンサートでした。また、先生方の授業の時に積極的に出向いてくださる。技術表現はあんなに音楽家(ソノ)の教員が少なかったのではないかと感じました。

在学生の声

坂野 アンナ(大学4年)

先生の掛け合いによる相乗効果は、まさかここまで、アンサンブル自体に魅力を感じました。また、楽曲はもちろん、お祭りの楽しさや共演者の方に対する敬意も持て歌われていたことも感銘を受けました。

澤地 豪(大学3年)

ドイツ語の発音が明確で、声帯の扱い方や言葉の表現方法など、普段のレッスンで指導を受けていることを、先生自らが無言で実践されている姿を拝見させていただき、大変勉強になりました。

関口 紫野(大学3年)

一人の作曲家を深く伝えられるコンサートでした。また、先生方の授業の時に積極的に出向いてくださる。技術表現はあんなに音楽家(ソノ)の教員が少なかったのではないかと感じました。

ピアノ



服部 容子 講師
田島 亘祥 講師



小川 典子 客員教授

教員からのメッセージ

世界レベルで通用する実力と、実社会で必要な人間力を学ぶことができる



2014年10月4日(土) 18:00 東京音楽大学100周年記念ホール
ドビュッシー 前奏曲集 第1巻(全12曲) 滝 麻太郎 / 徳 武清 徹 / 雨の劇集II—オリヴィエ・メシヤンの追憶—
川島 素晴 / ピアノのためのホルエチエド「ノボリ」 ベーナーヴェン / ピアノソナタ 第23番 小関「熱情」作品57
[アンコール曲]ラフマニノフ / 練習曲集「百の粒」作品39-1 中川 俊郎 / 「ピアノのための19の展開」より第8番

第7回 ピアノ教員によるコンサート

—小川典子ピアノ・リサイタル—

校風から磨かれた経験が現場で活かされる

現在、日本と英国をベースに演奏活動、教育や執筆、そして自閉症児・障害児の母親支援を目的とした「ジェイミーコンサート」や、東日本大震災のチャリティなどのアワード活動を行っています。

さまざまな現場に出て、さまざまな必要だと感じるのは「人間性」や「人柄の良さ」。付属高等学校の、明るさや人懐こさ、そして礼儀を重んじる校風に育てられた経験が、どの現場でも活かされていることに感謝しています。また最近では、コンクールで入賞したり、オーケストラやソロで活躍したりする在校生・卒業生が非常に増え、私が在籍していた時代以上に実力が上がってきているのを実感しています。世界に通用するハイレベルな実力と、国際的な舞台で渡り合える人間教育とを兼ね備えた付属高等学校の風土に、大きな誇りを感じています。

またピアノは、すべてを自分一人だけで表現する「ワンマンバンド」楽器。演奏する自分はいの「代弁者」です。その思いを常に忘れず、曲に、ピアノに向かってほしいと思っています。

レッスン受講生 渡辺 真司(大学院2年)

レッスンでは、先生のピアノの音を板前で演奏し、先生が曲の考え方や弾き方について、いつかの可能性を示してくれたら、具体的な演奏方法を教えていただける。講師は先生のレッスンを受け、その後、思いがけずリサイタルでは、先生の「絶対」は、必ずやります。

音楽を通して 人間力を育む

東京音楽大学付属高等学校では、音楽を通じた「人間教育」を行っています。個人がレッスンに励み、仲間とともにアンサンブルを奏で、お互いを高め合い、人としての調和を学ぶのです。そして、音楽家はもちろん、教育者や企業へも優秀な人材を輩出すべく、東京音楽大学の指導陣とも連携し、生徒の育成に、尽力しています。

また、特に優れた資質を有する生徒については、東京音楽大学への飛び級制度も検討しており、再来年度の実施を目指し、現在調整を進めております。

高校生活の3年間で、生徒が自らの将来像を描き、その夢に向かって一歩を踏み出してくれることを、切に願っています。

学校長 野本 正平



教員と生徒が一体となり、アンサンブルの授業を通じて、高い芸術性と豊かな人間性を備える人材を育成する、東京音楽大学付属高等学校。その魅力的なカリキュラムの一端をご紹介します。

高校生のオーケストラ

高校生で編成されたオーケストラは、本校の大きな特徴です。当然ながら、演奏の上手な生徒を集めただけではオーケストラになりません。そこにはチームワークが必要で、オーケストラ演奏を通して、社会的性、信頼関係、そして人との調和を学んでいきます。

また本校には、演奏室としてすでに活躍している生徒もいます。彼らと椅子を並べて演奏することは、どちらの生徒にとってもよい刺激になります。

年2回の演奏会は、生徒たちのモチベーションを高める大きな目標です。6月に学内演奏会があり、12月に東京芸術劇場で開催されるユニセフ・チャリティコンサートは、2000人のお客さまが集まる大舞台公演が近くと、生徒たちは自主的に早朝集まり練習を重ねるようになります。

生徒のなかには、高等学校で初めてオーケストラを体験し「音楽の本当の楽しさを知った」と話す者もいます。音楽への取り組み方に変化を与えるほど、オーケストラの演奏は感動的だったようです。課題曲をただ練習するのではなく、幅広い楽曲にふれることで、音楽への理解をより深めてくれれば、教育者としてこれほどうれしいことはありません。

オーケストラ指導 三原 明人

オペラ発表会

今年で30周年を迎えた、付属高等学校のオペラ発表会。これは「音楽演習」という授業の成果の集大成を発表するもので、今年もモーツァルト「魔笛」の一部のアリアを原語のドイツ語で上演するという、初めての試みにも挑戦しました。



声楽演習

迎えた本番。生徒たちが全力で発するドイツ語の歌と迫真の演技は、満員の観客の胸を打ちました。「夜の女王のアリア」のシーンでは、そのひた向きな姿に涙ぐむ方もいたとです。

公演後、反省会が開かれました。先輩の足を引っ張ったのではないかと、涙ながらに語る1年生、難しい立場で苦悩し続けた2年生、そして高校生最後の公演を終え、先生方と後輩に対し感謝の気持ち伝える3年生。高橋啓三教授は、「みなさんが今、純粹に感じていることは、将来にわたって役立つこと」と語りま

す。仲間とともにつくり上げる喜び、人間としての学びがそこにありました。

魅力的な試み

英語だけで行う授業

生徒たちが世界で活躍する将来を見据え、東京音楽大学付属高等学校では、英語による音楽の授業を導入しています。

アンドレ・アフリ教授による吹奏楽の授業では、実技とともに、実践的な英語力も育てています。

また、リック・オヴァトン准教授による音楽理論は英語で行い、ネイティブスピーカーの英語に触れることはもちろん、欧米的な自己表現の仕方等、国際的な感覚を身につけることも目指しています。

大学生との合同授業

管打楽器室内楽の授業では、大学生との合同授業を実施しています。東京音楽大学の教員に



吹奏楽



音楽理論

音楽をいしえとして 豊かな人生を創りあげてほしい

今回、「ユニセフ・チャリティコンサート」に出演でき、高校生の皆さんと共演できたことを嬉しく思っています。

思えば、いつも私のそばには歌がありました。好きで好きでしりょうがないんです。3歳の時に歌う喜びを知り、中学3年生で「オペラ歌手になりたい!」という夢を抱いて以来、私は多くの舞台に立ち、感動と喜びを味わってきましたが、決して楽しいことばかりの人生ではありません。辛いこともたくさんありました。でも、コツコツと続けてきたから、その苦しみ乗り越えた時にさらに大きな喜びが生まれるんです。さまざま人生経験の積み重ねが、歌を創っていきます。現在は4歳の双子の母親でもあり、育児や家事に追われながら、日常の小さなことを大切にしている気持ちは、今の私の音楽にもあらわれていると思います。

苦しみ乗り越えてこそ、本当の喜びがわかるようになります。若い皆さんには、これから先、大きな壁にぶつかっても、決してあきらめず、歌を続けてほしいと思います。希望を持って頑張れば、きっと楽しい世界に出会える日が来ますから。



林 美智子 Michiko Hayashi
声楽家 メソ・ソプラノ
東京音楽大学付属高等学校声楽、同大学音楽演奏家コース卒業。桐朋学園大学研究科、二期会オペラスタジオ、新国立劇場オペラ研修所第1期修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてミュンヘンに留学。「国際三トロボース声楽コンクール2003」で最高位入賞。第5回ホテルオークラ音楽賞受賞。

東京音楽大学付属高校
ユニセフチャリティ
コンサート
2014年12月4日(木) 18:00
東京芸術劇場コンサートホール

吹奏楽 アンドレ・アフリ(指揮)
アカペラ合唱 広瀬 宣行(指揮)
ピアノ独奏 藤田 真央
女声合唱 坂本 和彦(指揮)
林 美智子(メソ・ソプラノ)
只野 なつき(ピアノ)
辻 彩奈(ヴァイオリン)
園田 賀家(フルート)
オーケストラ 三原 明人(指揮)





第51回東京音楽大学芸術祭が11月1日から3日間にわたり開催されました。今年のテーマは「Next Stage」。51回目という節目の年を迎え、伝統を受け継ぎながらも新しい次元へ進んでいく決意が込められています。

メインコンサートは連日わたり超満員。初日のブラズ指揮も編曲もすべて学生で構成されたオーケストラ「Around the World」音楽を放して、「齋藤 真知亜先生ドミトリー・フエイギン先生をソリストに迎えた最終日の「Premium Orchestra」など、東京音楽大学らしい演奏会が、観客を魅了しました。

メインコンサート以外にも、申請すれば自主企画で演奏会を行えることが芸術祭の魅力です。約30団体が個性的なパフォーマンスを繰り広げ、芸術祭を大いに盛り上げました。

東京音楽大学 芸術祭

付属幼稚園



加納 里美
東京音楽大学付属幼稚園 園長

常に音楽が響き、生の音楽の素晴らしさがふれられる場所です。楽しみながら音楽を学び、挨拶に始まる礼儀作法や協調性、豊かな創造力を育みます。ピアノ、ヴァイオリン、マリンバ、歌の個人レッスンも行っています。運動会の数々を積み、演奏・行進を完成させる過程は感動的です。個性を大切にしたい、きめ細やかな教育を心掛けています。

付属音楽教室



村上 隆
東京音楽大学付属音楽教室 室長

優れたピアノ指導者、故・井口愛子先生が開校し、今年で40周年を迎えました。4歳から中学3年までの生徒を対象に、音楽の英才教育を基礎としながら、ピアノ、弦楽器、管打楽器、声楽、さらにリトミック、ソルフェージュなど、幅広く行っております。

レッスンを通じて、豊かな感受性・芸術性を身につけて、何よりも音楽することの楽しみと喜びを感じていただければ幸いです。



音楽と共に成長する

東京音楽大学と共に、20年間歩み、成長させてもらった



鼓笛隊

一生懸命に練習した鼓笛隊

幼稚園はリトミックやソルフェージュのレッスンなど、楽しいことばかりでした。

忘れられないのは、運動会の鼓笛隊です。本格的な指導があり、扱う楽器も分かれ、個性を駆使して演奏しました。演奏しながら行進することが難しく、何度も練習を重ねました。全員での合奏は、オーケストラのようなものでした。本番で成功した時のことは、今も記憶に残っています。

質の高い音楽にふれながら、学校生活を楽しむ

5歳でピアノを始め、卒業後も東京音楽大学付属音楽教室に通いました。レッスンや試験をつらいつと感じることもありました。ピアノの奥の初演奏など新しい感動もありました。

一方で、小学校・中学校では普通に通っていたこともよかったです。勉強に励み、陸上部にも



日スタジオ演奏会本番中

所属しました。学校行事でピアノ伴奏を任せられ、誇らしく感じたことを覚えています。中学2年の頃には音楽家の道を志し、東京音楽大学付属高等学校への進学を決意しました。

海老原先生との出会い

付属高等学校では、現在も出会っている、海老原直美先生との師事がありました。言うならば、「ピアノの母」。恥ずかしながら、恋愛相談をして慰めてもらったこともあります。先生と学生の距離が近いため、レッスンでのアドバイスもすつと入ってきます。

幼少からの音楽体験が今の自分をつくってくれた

いつの頃からかアンサンブルの楽しさを目指し、今はアンサンブルのピアニストを目指して大学院で勉強しています。振り返って実感するのは、幼稚園の鼓笛隊、学校でのピアノ伴奏、音楽教室でのピアノソロの経験が、自分にかかっている大きな影響を与えたかということです。

東京音楽大学は、まるで家族のように僕の人生に関わっています。こんなにも居心地のよい場所はありません。他にはありません。



尾崎 風磨
(ピアノ伴奏 大学院1年)

短期留学

モーツァルト国際サマーアカデミーへ



ユラマルグリス先生と一緒に

モーツァルトのアカデミーは歴史あるアカデミーで、講師陣は超有名な先生方。世界各地から何千人という学生が集まります。期間中のレッスンは4回。毎晩アカデミーコンサートがあり、先生に推薦された学生が出演できます。私もジュリオ（城）コンサートに出演させていただきました。日本では超一流の演奏会でない限り、なかなかないことですからうれしかったです。また、どうしても日本人はテクニックに偏りがちですが、海外の学生は自分の気持ちに日本に乘せることに長けており、演奏が響いている」と感じました。

レッスンの聴講もとても興味深かったです。自分がレッスンを受ける時は弾くことに必死ですが、聴講ではより客観的に見るため、自分の演奏に反映させようと思える多くの点に気づきました。一番勉強になったのは、自分のレッスンではなく、聴講だったのかも知れないですね。



伊福部 昭が愛用した1915～1920年代に作られたハンブルクのRahals社製のアップライトピアノ

2014年は、東京音楽大学学長、本学民族音楽研究所所長を務めた、日本を代表する作曲家・伊福部昭の生誕100年にあたります。

代表作であり、初めて世に発表された「ピアノ組曲」は19歳で書き上げたもので、きつかけは、スペインのピアニスト、ジョージ・コープランドに私人が宛てたファンレターでした。返信には「私の演奏を理解できるのなら音楽的に優れているだろう。もしピアノ作品があれば送ってくれ」と記されており、先生はその友人に「送らないと国際問題になる」と促され、必死に作曲したそうです。生前の「氏素性を音楽で語れ」という言葉どおり「ピアノ組曲」の出だしにも、盆踊りのリズムを取り入れています。伊福部節ともいわれるその楽曲からは、日本人としての音楽の原点が見えてきます。

芸術音楽だけでなく、管弦楽作品を書くための「日本でも唯一のバイブル」とも評される著書『管絃楽法』や、民族音楽の研究を行うなかで蒐集した明清楽器のコレクションなど、幅広い分野で日本の音楽界に貢献した伊福部昭。また教育者として、数多くの作曲家を育てたことでも、高い評価を受けています。

本学民族音楽研究所では「伊福部昭の遺された貴重な明清楽器の公開及び明清楽器を聴く『其の四』」を10月17日に開催。また図書館と共同で「生誕100年記念特別展示」五感で愉しむ伊福部昭」を催し、先生の作品や愛用のピアノなど貴重な品を展示しました。この試みを第一歩とし、その功績を本学の財産として発信していきます。

伊福部 昭 生誕百年

(東京音楽大学 元学長)



写真 小林 淳

2014年は、東京音楽大学学長、本学民族音楽研究所所長を務めた、日本を代表する作曲家・伊福部昭の生誕100年にあたります。

代表作であり、初めて世に発表された「ピアノ組曲」は19歳で書き上げたもので、きつかけは、スペインのピアニスト、ジョージ・コープランドに私人が宛てたファンレターでした。返信には「私の演奏を理解できるのなら音楽的に優れているだろう。もしピアノ作品があれば送ってくれ」と記されており、先生はその友人に「送らないと国際問題になる」と促され、必死に作曲したそうです。生前の「氏素性を音楽で語れ」という言葉どおり「ピアノ組曲」の出だしにも、盆踊りのリズムを取り入れています。伊福部節ともいわれるその楽曲からは、日本人としての音楽の原点が見えてきます。

芸術音楽だけでなく、管弦楽作品を書くための「日本でも唯一のバイブル」とも評される著書『管絃楽法』や、民族音楽の研究を行うなかで蒐集した明清楽器のコレクションなど、幅広い分野で日本の音楽界に貢献した伊福部昭。また教育者として、数多くの作曲家を育てたことでも、高い評価を受けています。

本学民族音楽研究所では「伊福部昭の遺された貴重な明清楽器の公開及び明清楽器を聴く『其の四』」を10月17日に開催。また図書館と共同で「生誕100年記念特別展示」五感で愉しむ伊福部昭」を催し、先生の作品や愛用のピアノなど貴重な品を展示しました。この試みを第一歩とし、その功績を本学の財産として発信していきます。

新国立劇場 オペラ研修所 第18期生決定



吉田 美咲子
2009年大学卒業
2011年大学院修了

砂田 愛梨
2013年大学卒業
大学院 2年

平成27年度入試要項の変更について

1. 一般入学者選抜試験において併願を希望する際の入学検定料を以下のとおりとします。
入学検定料：38,000円 ※併願料は不要です。
2. 声楽専攻(声楽)、器楽専攻(ピアノ、オルガン、チェンバロ、弦楽器、管打楽器)を受験し、不合格となった場合、併願をしていなくても適性により面接を経て、音楽教育専攻実技専修コースに合格となる場合があります。詳細は、合格発表時にお伝えします。

広がるネットワーク

東京音楽大学 福岡音楽教室に聞きました



「東京音楽大学 交歓演奏会」に出演した三島 麗水さん(福岡音楽教室)
2014年10月25日
東京音楽大学 100周年記念ホール

現在師事している先生を変更することなく、福岡で年に数回「東京音楽大学の一流の教員によるレッスン」を受けることができる教室です。

2013年4月からスタートし、現在25名の生徒が本システムに登録しています。一定の条件を満たすと東京音楽大学指定校推薦試験を受験することができ、対象はピアノ、2015年度は、本教室から1名合格しました。

保護者の方からは、「今習っている先生に比べて先生が丁寧で、東京音楽大学の先生に教えていただけるのがいい」「いろいろ相談できてためになる」「福岡の先生からは「レッスン」は勿論、先生方の大学時代の経験話などを聞けるのも楽しみのひとつ」と好評です。

仙台山形でも、同システムの音楽教室がスタートし、ネットワークが広がりはじめられています。

